みみずの紐
片桐天音
野沢菜
有坂

cover illustration: 日溜。

Full Text Views

いっぱいテキストビュー

いっぱいテキストビュー

野沢菜
みみずの紐
片桐天音
有坂

もくじ

Aの手記　3
家賃六万円弱　7
グラナイト　13
運び屋　35
表紙デザイン――日溜。

Aの手記

野沢菜

「探さないでね。探してもきっと見つからないと思うけど」
それは、チラシの切れ端に書かれた、とても身勝手な置手紙だった。この日が来るまで、大切だと思っていたものがふっと消え去ってしまう、そんなこと、考えてもみなかった。
いつものようにご飯を食べて、いつものようにおしゃべりをして……さっきまで、いつもと変わらない、本当になんの変哲もない日だったのに。
もしかすると、あの人はそんな日常に飽き飽きしていたのかもしれない。何かに急かされて、何もかもが目まぐるしく変わる、落ち着きのないこの街のことが好きだったから。
あの人と出会った交差点、広告ネオンで眩しい照らされたいつもの待ち合わせ場所、一緒に行列へ並んだけれど味は微妙だったカフェテリア、みんな何か別のものに変わってしまった。お金を追い求める人々と、その日暮らしの作業着姿の人たちが、大切な場所を踏みにじり、別の何かに変えていく。
この世のすべてがあるこの街の、きっとどこかにいるはずなのに、いくら探しても見つからない。街が変わってしまったから？　だったら、変わっていない場所に行けば見つかるのかも。けれど、変わらない場所なんて、この街のどこにもあるわけない。どこもかしこも、どこに行っても、みんながみんな、変わっているんだもの。
すべてが固くて灰色で、すぐに壊れるこの街で、あの日見た蜃気楼を探し続けている。終わりが来ると思いもしなかった頃の能天気な私が、もしも今の私を見かけたら、きっと馬鹿にするに違いない。

＊

忘れることで強くなれる、そんな風に人は言う。けれど、あの人のことはどうしても忘れられない。
変わり続けるこの街に、私もこの身を委ねようとしたけれど、そのたびにあの人のことがまぶたに浮かぶ。まぶたに浮かぶあなたの姿は、あの頃と全く変わっていない。変化を忘れたその姿は、この街が好きなあの人には似合わない。
似合わない姿であっても、あの人はそこにいる。瞬き

ひとつせず、私をひたすらジッと見つめている。私は瞬きしているから、見つめ返すことはできないんだけれど。
もしかしたら、向こう側に行ってしまえば、見つめ合うことができるのかもしれない。きっと、瞳を閉じるたびにもどかしい思いをしなくてもよくなる。瞳を閉じた向こう側、そこがどこかは分からないけれど。

＊

今日、夢の中にあの人が出てきた。私の知っているあの時の姿のままで、あの時と同じように私と接してくれる。
なにも変わらない風景、なにも変わらない日常。ヘロヘロに伸び切ったＶＨＳテープのようにぼやけているけれど、そこにはあの時の幸せが確かにある。
なにもかもが移りゆく街と、変わらない記憶、大きな違いだと思うけれど、そんなのは関係ない。なんてったって、街が変わるのは止められないけれど、私自身を留めることはできる。私を変えるのは私自身なんだから。
明日もあの人の夢、見れるかな。

＊

夢がだんだんおぼろげになってきて、あの人の姿もふやけてきた。
いつもと同じ場所に探しに行って、いつもと同じ時間に諦めて、いつもと同じ時間に夢を見る。私は何も変わっていないはずなのに、あの人は変わっていく。
時間は確かに経っているけれど、それだけでここまで変わるだなんて思えない。記憶の中のあの人も、きっと変わることが大好きで、あの日の書き置きと同じように、私から離れていこうと必死なんだ。
変わらない私がそんなに嫌い？
あの人は嫌いなんて一度も言わなかった。記憶の中のあの人も同じ。おぼろげな姿で、いつもあいまいな受け答えをしてくれる。
嫌いなら、そう言ってくれれば諦められたのに。
あんな置き手紙を残したせいで、ないはずの希望を見つけてしまう。そこにあの人が現れることはないはずなのに、もし現れたら……そんなことばかり想像してしまう。
あの人は、なにを思って置き手紙を置いたのだろう。夢の中のあの人に聞いても、何度何度聞いても、その答え

を教えてはくれない。

私はあの人のことを何も知らない。

＊

夢にあの人が出てきてから、もう何日経っただろう。夢の中のあの人はいつも、同じぼやぼやの姿で私を出迎えてくれる。

出迎えてくれた後のことは全く思い出せない。思い出せないのはつらいけれど、夢の中ならあの人に会える。それだけで、とっても嬉しい。

あの人探しは相変わらずで、どこを探しても見つからない。月日が経ちすぎてしまって、もはやどこを探すといいのかすら分からなくなってきた。私とあの人との関係は、もしかすると、「この世のすべて」なんてものと関係なかったのかもなんて思えてくる。

夢の中のあの人が変わらないのは、関係ないことを教えてくれているのかもしれない。あの人は「この世」と関係がない、だから夢でいつも私を出迎えてくれる。そうか、「探してもきっと見つからない」なんて嘘だったんだ。

もっともっと眠ればきっと、その先のことも思い出せるようになるはず。

家賃六万円弱

蚯蚓の紐

確か五月晴れは、夏の季語だそうです。とは言え、たかが五月でここまで茹だるほどの熱気に揉みしだかれるなんて、一体誰が想像できたでしょうか。

東京は月島に佇む単身用アパートの一室には、肩紐の緩んだタンクトップにゴム紐の伸び切った半ズボン（いずれも上下柄不一致）を召した女というものが、おおよそ二匹ほど寝転がっておりました。そのうち一人はわたしで、もう一人は大学でなんだかんだあって意気投合した結果、大家に無断で勝手に住み着いているわたしの友人です。

さて、一般に四月の下旬から五月の上旬にかけての大型連休の時期というのは、講義も一切開講されません。ただでさえ今までも時間を持て余していた大学生の人間性を辛うじて繋ぎ止めていた、あのリモート授業すらも開催されません。すなわち鉄格子からの脱出を許可されたモラトリアムの猿共が、毎晩夜まで飲み明かし、昼過ぎに二日酔いで目を覚ますような昼夜逆転生活を長々続けたとしても、それを咎める手はずが存在しない期間ということになります。

この二人もその例に漏れず、今朝も十時になると、音声アシスタントが定刻のニュースを垂れ流し始めるので、うつらうつらとしていたわたしの意識もようやく覚醒の時を迎えます。何処其処で誰が何人感染したとか、不景気で平均給与が下落したとか、今日も非常事態の中で有象無象に紛れた情報が淡々と吐き出されますが、その全てが耳を滑り抜けていきました。寝たきりの状態で天井のシミを数えつつ待ちつつをしておりますと、ようやく天気の出番が回ってきます。

《……月島では最高気温が三十度、最低気温でも二十三度となり、湿度も六十パーセント台を維持するため、今日は非常に蒸し暑い一日となるでしょう》

わたしは瞬時に煎餅布団を押しのけ、隣で惰眠を貪る（半）同居人を叩き起こしました。

「ねぇ聞いた？　今日三十度だって！　三十度！」

「っさい……も少し寝かせてくれんか、夜遅かったんじゃ……」

「どーせ夜通しでゲームしてただけでしょ。ほら、冷房点けよ冷房」

わたしは意気揚々と、今年始めての稼働となる冷房く

んに向けてリモコンを操作しますが、ウンともスンとも言いません。

「えっ、嘘、故障？」

「リモコン貸してみ……ほら、液晶に何も映っとらんよ。ただの電池切れや」

「えぇ……あ、しかも単三。ストックしてないわ。最悪……」

「他所から乾電池の前借りでもすればええんとちゃう？」

「それが、全部単四なのよ。最近見かけなくなったよね、単三」

ひとまずはカラカラの喉を潤すため、冷蔵庫から麦茶のボトルを取り出すことにします。

「婆さんや、ウチにも麦茶を一杯……」

どこからともなく呻くような注文が飛んできました。

「どっちが婆さんよ。氷も入れる？」

「いや、ひゃっこすぎると頭痛くなるんよ。ここは麦茶のトゥワイス・アップを……」

「はいはい、水割りね」

「ちゃうねん、そこは水との比率が……」

「お待ちどう様」

「あ、こらかたじけない」

同居人は麦茶のグラスを受け取ると、間髪入れず一気に呑み干し、ノンアルなのに酒臭い息をこれでもかというほどに吐き出しました。

「か〜っ、うまいっ！」

「リットルあたり三円相当の麦茶を、世界一美味そうに飲み干せるのはアンタの才能ね」

「え、安すぎひん？」

「そらいっつも増量されてるからね……」

＊

「喉元すぎればってやつやね。もう汗が止まらへんわ……」

「それには同感ね。扇風機一台の風圧で二人を補うのは限界かな……」

「窓開けへんか？」

「いいけど、後悔するよ」

同居人が窓を開けると、細やかなそよ風と共に、ガラスにせき止められていたトンテンやらカンテンやらの轟音が一気になだれ込んできました。ドリルやらチェーン

ソーやら溶接やらの生々しい多重奏は、周囲が海で囲まれているのをいいことに、月島住民の迷惑だけを顧みず、力の限り放出されていたのです。

「うっさいわ！　反射で閉めたわ！」

「晴海の方でずっと工事続いてるからね。何でも来年に向けて拡張するんだってさ、選手村」

「これ以上工事してもしゃーないやろ……」

「あきらめましょ。今わたしたちにできるのは、このクソ熱い中我慢してコンビニまで単三を買いに行くか、もしくは運動による発熱を極力減らすこと」

わたしはシワだらけ髪の毛だらけの敷布団に、背中から倒れ込みました。

「そう言って自分、何もしたくないだけやろ」

続けて同居人も寝転び、横に伸ばしたわたしの腕を枕にしてきました。

「痛いって、こら」

意図せず視線の先がお互いの眼球へと向き合います。

同居人は綺麗な目をした女でした。そういえば普段あまり目を合わせて会話しないので忘れていましたが、この一見すると身だしなみに興味のなさそうな関西人（出身県名は忘れた）は、目の美容に対して偏執的なほどのこだわりを有しているのです。こいつは日々化粧系ユーチューバーのマスカラ比較動画を見漁り、日と用途によってアイプチを使い分け、よりにもよって目尻切開法を夢見て貯金を貯めるような、そういった気を取り違えた女なのです。まぁ身も蓋も無いことを心の内で申し上げますと、個人的にはメイクも何もつけていない今の目が一番好みなのですが。

こうしてしばらく間の悪い沈黙が続いてしまいます。

汗でしっとりとした髪の生え際にも、汗で滑って肩からずり落ちた肩紐にも、いくらでも注視する視線の先を逸らせたはずなのに、なぜわたしはこの黒の虹彩へと吸い込まれるのでしょうか。

「なんや？　惚れたん？」

「ちがわい、バカ」

「そら今どき仲良しのカップルでも、ご時世柄相手のお宅に長居はせんからな。ウチらは実質それ以上やろ」

「ったく、自覚があるなら大人しく自宅待機してなさいっ

ての。なーにが一人の飯は味気ないから嫌だ、よ」

「せや、その通り。せやからぼちぼち昼飯にしよか」

「はいはい。何食べる？」

「確か去年お歳暮に送ってもろた冷麦がまだのことるやろ。あれ茹でよか」

「よう覚えてるわね、そんな一年前の台所事情なんて。一応素麺もまだあるけど……」

「否、断然冷麦！　素麺やとほっそくて食べた気せえへんから嫌いや」

「別にうどんみたいな食べごたえを求めるもんでもないでしょ、素麺は……。じゃあ冷麦ね。こっちで茹でとくから、ちゃぶ台出してふきんで拭いといて」

＊

冷麦用に使ったそば猪口もまだ片付いていないちゃぶ台の上では、既に安焼酎と安日本酒のボトルがドカドカとその空間を専有していました。わたしも最初は良い心持ちを保っておりましたが、工事騒音が落ち着き、斜陽が影を落とす頃合いになってくると、自分でも知らぬ間に笑い上戸から泣き上戸へと転向してしまうそうです。

「はぁ～っ、もう日が沈む……あぁ、また無意味に呑んだくれて一日が終わってしまったぁ～っ……これがゴールデンウィーク特有の虚無感なのかぁ……」

「まぁまぁ、今日も一日外出せず引き篭もることができたんやから。じゅーぶんに偉い偉い」

「同居人よ、貴女に頼みがある」

「なんや？」

「これから今日一日を有意義なものにしたい」

「知らんわ。先行きの不安な今日この頃やし、将来設計でもすれば有意義なんとちゃう？」

「将来かぁ。わたしはねぇ、プログラミングとかさっぱり分からんけどエンジニア目指すよ！」

「ほほう」

「でもさ、デスクに齧りついてパソコンカタカターみたいのじゃなくてぇ、わたしはもっとこう、誰もやったことのない、未知の技術分野での開発ってのをやってみたいわけですよぉ」

「あー、ニュースでも言うとったわ。歴史的な周期に基

グラナイト

片桐天音

づくと、今後五年以内に生活が激変するほどの革新的な技術が登場するだろう、とかなんとか。ま、どんな技術なのかはさっぱり想像もつかんけどな」

「そう、それよ。この不安定なご時世、わたしはロマンを追い求めたいわけ。空飛ぶ車！　仮想現実！　瞬間移動！　そういった代物に手を出したいわけですよぉ……」

「案外自分やったら、さらっとその類の仕事を手につけてそうやけどな」

「そんでお賃金を稼いだら、まずはこの家賃六万円弱のアパートを脱出するわけですよぉ。グッバイお台場。それから騒音に絶対悩まされない都内の億ションに居を構えて、厚みのあるふっかふかのスプリングベッドに羽毛布団を敷いて、一匹のジャンガリアンハムスターをペットに従え、面倒な身支度は全て人工知能がやってくれる。そういった悠々自適な生活がしてみたいわけですよぉ。まぁそのためにもね、この自堕落なゴールデンウィークが終えた後には、心機一転、メリハリを大事に、心を入れ替えて真面目に勉学に励みたいという所存であって……」

「酔うと妙に真面目やから面倒くさいんよなぁこいつ。ことなく理想も糞真面目やし。あ、そういえば」

「どした？」

「今思い出したんやけどな、とっておきのニュースがあるんよ」

「なになに」

「ええか、ビックリして酔いが覚めても知らんで」

「いいから早く」

「実はな、さっきカレンダー見て」

「うん」

「ゴールデンウィークやけど」

「うんうん」

「昨日で終わっとったわ」

喫茶店で

「で、今日こうやって私が紹介して、それでミカが買ってくれたら私に十パーセントの配当があるから――」

セントラルラインに乗ってわざわざ二時間かけてやってきた喫茶店で、私はなぜかマルチ商法の勧誘を受けていた。十パーセントの配当がもらえるから、何人に売れば回収できて、半年もすれば何百万円になるから……どこかで聞いたような話ばかり。

今日は全てがおかしい。数年ぶりに旧友に呼び出されていることも、私がそれに応えてここまで来てしまったことも。そのせいでおかしな儲け話に巻き込まれそうになっていることも。

そして、目の前の旧友が綺麗になっていることも。

アルバムで見慣れていたはずの彼女の顔は、まるで人が変わってしまったようにさっぱりと垢抜けている。その表情は都会じみた空気をまとっているものの、悪く言えば個性がなくなっていた。

ふと目線を落とすと、茶色い合成木の四角いテーブルに置かれたタブレットが延々と動画を流し続けている。妙なパースの3Dグラフや資金繰りを示す折れ線が、大きく広がったり上に伸びたりしているのを見ていると、視界がぐにゃりと歪む気がした。

「最近のオススメはこっちかな。サプリメントも悪くないんだけど、使用期限がないから廃棄が少なくて――」

そうやって商品を説明する声も、あの頃の気弱な彼女とは全く違う。本当に儲かると言わんばかりの自信に満ちたその声は、やはり同じ人とは思えないほど変わっていた。まるでスピーカーから流しているように安定した声は妙に明るくて、聞いているだけで私たちの温度差がぐんぐん広がっていくように思えた。

でも、上野でリニアを降りて地下深くからエスカレーターで改札まで上がる間、楽しそうに話す彼女はやはり昔と変わらなかった。私が先に入った一人用のパラキン[1]にわざわざ乗り込んできた彼女は、確かに懐かしい空気をまとっていた。

そうだとしたら、私は何をもって彼女を彼女だと思った

---

1 エスカレーターのステップに取り付けられた昇降用のかごを指す。

のだろう。どうしてあの日の彼女を懐かしんだのだろう。

「どう？　悪い話じゃないと思うんだけど」

そう言いながら、マミはオフホワイトのトートバッグから分厚いパンフレットを取り出して机に置いた。

胡散くさい笑顔で手を取り合う男女の写真が刷られた表紙には、儲かるだとか確実だとか根拠のない自信が（おそらく法律に抵触しない範囲で）散りばめられている。

「ちょっと待ちなさいよ」

その表紙をひったくるように裏返すと、マミの困惑した視線が私に突き刺さった。

「マミ、今日の話ってこれのことなの？」

「うん。でもこれだけじゃないよ。他にもいろいろ話したくて、だから呼んだの」

他に用事があったって、このネットワークビジネスのために呼んだのなら意味がない。私が聞いているのは、何の目的で呼ばれたのかってことだ。

「えーと、あのねぇ……」

要領を得ない彼女の発言に、私は思わず額に手を当ててしまう。マミもいらいらした時の私のくせは覚えていたらしく、パンフレットをバッグにしまってから取り繕うように笑った。

「でも、リニアってすごいよね。すぐ会えるんだもん」

「そうね。超電導って本当に素敵な技術だわ。今すぐにでも帰ってみんなにも教えてあげたいくらい」

新型の超電導リニア特急がソーラーパネル畑の間を駆け抜けていく様子はそれなりに爽快だったし、あんな田舎からすぐに東京まで出られるのだって、確かに素晴らしいことなんだと思う。

でも、こんなことになると知っていたら来なかったのに。的外れな期待をした私がバカみたいだ。

「私を騙したの？」

「騙してないよ。話があるから来てって言っただけ」

確かに、マミは私に会う目的を告げなかった。言いにくいことなのかもしれないと、直接話さなきゃいけないことでもあるのだろうと、深読みして勝手に盛り上がっていたのは私の方だ。

だから、私が勝手に勘違いしていただけ。そうなのかもしれない。でも、そんなのただの言い訳だ。

「ミカ？」

マミは困った表情に曖昧な笑顔を混ぜて「ごめんね？」と、理解しているのかしていないのかよく分からない様子で私の顔を覗き込んだ。

「まぁ、いいわ」

溜息を吐く。冷静に考えれば、マミが私を騙そうとするわけなんてない。彼女だってそのうちおかしなビジネスに巻き込まれていたと気付くだろう。

それに、今さら怒ってもどうしようもないし、言った言わないの水掛け論でマミを困らせたいわけでもなかった。もう私に契約するつもりがないことはマミだって分かっているだろうから、後は話を合わせて適当なところで帰ればいい。

氷が解けて薄くなったカフェラテを、カップの角からゆっくり飲み干してテーブルに置く。落ち着いたら、さっきまで意識の外にいた目の前の奇妙な料理のことが気になり始めた。

「で、これって何のお肉なの？」

メニューに「ステーキ」とだけ書かれていたこの料理は、色や形こそ焼かれた厚切りの牛肉に見えるけど、レアもウェルダンもない噛み心地と、溢れる消毒液のような香りはまともな食べ物とは思えない。

とっても美味しくないんだけど、と小声で告げると、マミは意外そうな顔をする。同じ料理を頼んだ彼女がそんな顔をするなんて、きっと舌でも手術したんだろうと思うくらい、例えるならカルキ漬けの肉というのにふさわしい味だった。

「なんだろうね？　認証は通ってるみたいだし、ただの合成肉だと思うけど」

そう言ってから、マミはまた「ステーキ」を一切れ頬張った。もぐもぐ、ごくん。そして、別に美味しいけどなーと首を傾げる。ふざけているつもりはなさそうだ。私が口に手を当てて驚くのさえ、彼女には不思議らしい。

メニューを見ると、店名や営業時間の情報と共に正方形のシールが貼られている。マミの言う「認証」というのはこれのことだろうか。その横に印刷されたハラール認証のマークは知っているけど、フラスコの中に歯車を置いた金色のロゴに「A7相当」と記されたマークは見た

こともなかった。

「口に合わなかったら自然肉にする？　言ったら変えてくれると思うよ」

そういって「すいませーん！」とウェイターを呼ぶマミを慌てて止める。私には「国産自然肉ハンバーグ」の代金を払えるほどの持ち合わせはなかった。また妙なお肉が出てきても困るし。

ため息をつく。マミってこんなに強引なやつだったっけ。

＊

「ねぇ、マミ。あんた、整形したの？」

仕方なく頼んだアイスカフェラテのおかわりを飲みながら、私は気になっていたことを尋ねた。

的外れなことを聞いてしまったかもしれない。でも、駅で彼女を見た時の違和感はまだ私の中にある。いくら頑張ってメイクしたって、違う人に見えてしまうほど顔が変わってしまうとは思えなかったから。

「整形？　うん……ちょっと違うけど、そんな感じ」

マミはまた曖昧な答えを返す。そのはっきりしない態度は昔の彼女の面影をぼんやりと残しつつ、今はただ隠しごとの微妙な気配を感じさせるだけだ。

私が何も言えずにいると、少しの沈黙が流れた後にマミが再び口を開く。

「足りないんだよね、あと少し。お金が」

マミはそう言いながら、ばつが悪そうな様子でタブレットをトートバックにしまいこんだ。

お金が、あと少し、足りない。足りないというのは、次の整形手術のお金のことだろうか。それとも、もはや当座の生活費すら危うい状態なのか。どちらにせよ、彼女の状況は褒められたものではないだろう。どんな理由であれ、詐欺まがいの商売にまで手を染めてしまったのだから。

「だから、こんな胡散臭いビジネスを始めたの？」

「うん。でもこれは確実に儲かるから――」

「じゃあ、なんでわざわざ私を呼んだのよ？」

彼女の言葉を遮るようにそう尋ねると、マミは面食らったように目を見開いた。

「だって、ミカに会いたかったから。そう言ったでしょ？」

「でも、私たち……もう終わったじゃない」

彼女に「会いたい」と告げられた時、私は密かに期待していた。マミがまだ私を好きで、忘れられなくて、告白するために呼んだのかもしれない。あるいは、恋人と別れたと一言告げるために。

流石にそれは言い過ぎだとしても、会いたいという言葉に嘘はないと思っていた。

でも、マミは？　マミにとってそれは何でもない一言で、それに呼び寄せられた私なんてお金儲けの手段でしかなかったのだろうか。

「確かに私はマミにひどいことをしたわ。でも、それだってもう……だったら、仕返しのつもりなの？」

「そんなこと、どうでもいいよ。むしろ感謝してるくらい」

マミはどうでもいいよ、と吐き捨てるように言い放つ。私には、彼女が何を考えているのか分からなかった。

「じゃあ、どうして――」

「ミカに、完璧になった私を見てほしいと思って」

その質問を待っていたかのように、彼女はにやりと微笑んだ。「完璧」という言葉に、おぞましい憎しみが込められているような気がした。私がしたことに人生をかけて復讐しようとでもいうように。

背筋が震えるその感覚に、私は思わず立ち上がっていた。

「……私、帰るわ」

「あはっ、どうやって帰るの？　都民カードもないのに」

都民カード、という響きで思い出す。上野で長い長いエスカレーターに乗っている間、「無申請訪問者（プライベート・ビジター）は二名まで」という啓発のポスターを何度か見かけたのだ。それを見たマミが「最近警備が厳しいんだよね。流通の管理強化とかで」と言っていたのはこのことだったらしい。

マミが改札でかざしていたピンク色のカードが「都民カード」なのだとしたら、私が東京に出入りし、滞在するには都民カードを持った誰か――これはもちろんマミのことだ――の協力が必要ということになる。つまり、今夜の私の寝床さえも、彼女の気まぐれということだ。

そんなこと知らなかった。どうして教えてくれなかったのよ、と座ったままのマミを見下ろすように睨みつけると、彼女はもう一度、いたずらっぽく笑った。

マミの家で

やはり、私は騙されていたらしい。結局、半ば強制的にマミの自宅に連れ込まれていた。マルチ商法の勧誘さえも壮大な謀略の一端で、本当は私にもっとひどいことを仕掛けようとしているんじゃなかろうか。

「マミ。そういえば、これ」

「あ、そうだった。ありがと」

恐る恐る紙袋を差し出すと、マミは嬉しそうにビニールの取っ手を掴んだ。

中身は近所のディスカウントストアで買ったビー玉だ。東京に来る前に持ってくるよう頼まれたのだ。どうしてそんなものを欲しがるのか私には分からなかったが、これで家に帰してもらえるなら安いものだ。

「別にいいけど、そんなの何に使うのよ」

「ペンダントが壊れちゃって。代わりに使おうかなって」

マミがそう言いながら袋の一つを取り出してビニールのネットを裂くと、メタリックな光沢を塗られた青いビー玉がぼとぼととフローリングにこぼれ落ちる。

「うん、ちゃんと転がるみたい……ミカ、ありがと」

急に何を始めたのだろうと彼女の顔をちらと見ると、マミはにまにまと笑っていた。ビー玉なんだから転がるのが当たり前じゃないだろうか。

「球体っていうのは、恩物の中でも理想の図形なんだよ。フレーベル氏が言ってた」

フレーベルについて聞き返すよりも先に、マミは恩物について話し始めた。

恩物は幼児向けの知育教材で、球体に始まり、立方体、直方体、プレート、棒、リングと様々な図形で遊ぶうちに自ら学ぶ力を身につけられるのだという。それぞれの図形は人間が必要とする概念の習得に重要で、その中で最も大切なのが球体らしい。

しかし、マミはどうして急にそんな話をしたのだろう。マルチ商法の時といい、東京に来たせいで変な宗教にでもハマっているんだろうか。

「だから、私たちには球体が必要なの。ビー玉でもね」

と、すらすらと話すマミの声を聞いていると、やはり昔と違うそのハリに違和感を覚えずにはいられなかった。

「マミ、昔よりずいぶん声が良くなったみたいね。ボイストレーニングでも通ってるの？」
「違うよ。声帯を機械化したの」
「機械化？　どうしてそんなことしたのよ」
まるでスピーカーから流しているような声、と思ったのはあながち間違いではなかったらしい。ふと「私が変な声って言ったから？」と聞きそうになったけど、なぜか言葉に詰まった。
「アバター使って動画を配信しててね。毎日声を張るのが結構しんどかったから変えてみたの」
そう言って、マミはタブレットを操作して動画を再生する。銀髪ショートボブのアバターが、たくさんフリルの付いたウェイトレス風の可愛らしいオレンジ色のドレスを着て踊っていた。

＊

『マミ、背中弱かったよね』
『んー……手術のせいで、もう感じなくなったんだよね』
『あら、そうなの』
『私、もう変じゃないよね？』
『えっ？　そ、そうね……変じゃ、ないわ』

＊

次の日、防災無線塔からの放送で、東京が数ヶ月の完全都市封鎖に入ったことを知らされた。既に東京にいる私のような無申請訪問者（プライベート・ビジター）も、封鎖明けまでは帰ることができなくなったということだ。
「マミ、どうして言ってくれなかったのよ」
「ごめんね。どうせ都民はずっと東京から出られないから、あんまり気にしてなかったの」
また、騙された。そう彼女を責めるより先に、マミは笑顔で身を乗り出してくる。
「それよりミカ、こっちで働かない？」
向こうより稼げるよ、というマミの言葉はやはり怪しい響きを含んでいた。
マルチ商法の手伝いか、あるいは身体でも売らされるのか、もしかしたらもっとひどい仕事かもしれないと身構えていたけれど、聞いてみると在宅でマミの動画配信

を手伝えばいいらしい。
「ちょっとした吹き出し付けたりとか、効果音を差し込んだりしてくれればいいから」
「んー……そうね……」
悪い話ではなかったけど、マミがどうしてこんなにも私を気にしているのかがまだ分からない。つかみどころのない彼女に全てを委ねるのは、一抹の不安もあった。
でも、思い浮かぶのは、昨日まで住んでいた——県と、つまらなくて代わり映えのしない仕事の毎日。それがもう、今はずっと遠くにある。
「分かったわ、やってみる。よろしくね」
田舎特有の先が見えない閉塞感はもうここにはなくて、私が私として生きることを誰も否定したりしない。ありきたりな田舎者らしく、都市の自由に夢を見ていた。

＊

一緒に住むならパートナーシップ[2]を取った方がいいよ、とマミが言う。都民カードがないと何かと不便だし、パートナーが都民なら転入手続きも通りやすくなるらしい。
「でも、まだ区役所が開いてないんじゃない？」
「ふふっ、ミカって面白いね」
ほとんどの手続きは都民カードとスマホがあればできるらしい。わざわざ区役所に行く人はもうほとんどいないし、窓口で手続きしたい場合はむしろ事前の予約が必要だという。
だって、そんなの知らなかったもの。
マミはブラウザを開いて何度かタップしながら、大昔に都民カードを紛失して以来行ってないよ、というような話をしていた。
スマホでの転入手続きはとてもシンプルだった。特に無申請訪問者向けの（プライベート・ビジター）転入手続きは、完全都市封鎖の直後からワンタップで呼び出せるようになっている。
マミが「——ミカゲ」「女」「二六——年・夏」と、知っている限りの私の情報を打ち込み始めた。たまに尋ねられるのは、両親の生年月日とか、これまでの恋愛遍歴（本当に必要なのかしら）くらいで、何年も離れていたのに

---

[2] 婚姻制度が漸次廃止されつつある中、次世代のライフスタイルに合わせて人間同士の多様な関係を公的に証明するための認定制度のこと。

よくそんなに私のことを覚えているなと思う。
「じゃあ、アイリス撮るからこっち見て」
ぱしゃり。顔写真ではなく、虹彩のダイジェストを計算して記録するのだという。
『――時――分、登録が完了しました』
「じゃあ、私のカードでミカのスマホを登録するから、ちょっと貸してくれる？」
時報を聞いてふと時刻表示を見ると、五分ほど遅れていた。スマホの時計が狂うなんて聞いたことがないと思いながら何度かスワイプするけれど、どうにも直らない。
それ見たマミが「東京はＴＡＩ[3]ベースなんだよ」と言って、何度か都民カードをかざした。

＊

ほとんどの買い物は通販で済ませていたけど、かさばる荷物は送料が高いからスーパーに出かけることがあった。
そうやってスーパーに行く途中、よく道端に倒れて動かなくなっている人がいる。ほとんどの人は血を吐いていて、ひどい時は皮膚が剥がれ落ちていることもあった。始めの頃は意識がないのを確認して救急車を呼んでいたけれど、道行く者が誰一人として目もくれないのを見ると、徐々に触れてはならないことのように思えてきてしまう。
だから、最近は私も足早に通り過ぎるのだ。次通った時にはもういませんように、と祈りながら。
その話をすると、マミは「変な病気が流行ってるらしいから、近づいちゃだめだよ。ミカも気をつけてね」と言う。そして、彼女が着けているのと同じビー玉のペンダントを私の首に掛けるのだ。
このおまじないには、どういう意味があるのかしら。

電気街で

家から出なくていい仕事だから、としきりに言っていたマミが、時折ミーティングと称してどこかに出かけているのは明らかにおかしかった。
朝早く出かけて、帰ってくるのは夕方くらい。スマホとカードだけで楽しそうに出かけていくマミは、およそ仕事のために出かけているようには見えない。
しかも、一度だけビー玉のペンダントをどこかに忘れてきた時があった。アクセサリーを外さなきゃ進められないミーティングなんて、どこにあるんだろう。
身体を売っているのか、私の知らないパートナーと会っているのかは分からない。でも、私に隠しごとをしているのは明らかだった。
「ねぇ、マミ。最近どこに行ってるのよ」
「あれ、言ってなかったっけ？　ミーティングだよ」
もちろん、これは嘘だ。ミーティングはいつも画面越しだし、私も彼女もチーフエンジニアの顔さえ知らない。画面に映るのは、ぼんやりとした線の青髪ツインテールの女の子だけだ。髪がぴょこぴょこ揺れるのに合わせて聞こえる声だって、フォルマントをいじってフィルタされている。
私たちが最先端の設備や技術を導入しているわけではなく、これが東京でのオフィス労働の実態だ。マミは時折、こうやって調べなくても分かるようなわざとらしい嘘をつく。騙されてくれるよね、とでもいうように。
「……あ、そういえば、明日から一週間入院するから。配信は適当にやっておいてくれる？」
「何よ、入院って」
いつものことながら、マミの話はあまりに唐突だった。上着をハンガーに掛けながら、そうやって世間話のように平然と大事な話を切り出そうとするのだ。
「ちょっと手術しなきゃいけなくなって。死ぬわけじゃないから大丈夫だよ」
「違うわよ！　そういう大事なこと、どうして早く言ってくれないの」
明日から手術だなんて、仕事仲間としても、パートナーとしても早く伝えなきゃいけないことのはずだ。手術だってミーティングだって、きっと嘘だから適当なことを言っているんだろうけど、本当だとしたらより悪い。どうしようもない怠慢だ。
立ち上がって大声を上げた私を、マミは意外そうな表情で見つめる。
「ミカって、普通の女の子みたいなことも言うんだね」

[3] 国際原子時のこと。

マミはそう言って、少しだけ笑ってみせた。

＊

次の日、マミを尾行した先にあったのは、電気街の端にある古びた雑居ビルだった。若い女性がまともな用事で出入りするような場所には思えない。

しかし彼女は周りを気にする様子もなく、狭くて暗いエントランスからビルに入っていった。エレベーターに乗るのに合わせて私も廊下を進む。もう戻れないところまで来ているような、おぼつかない心地がした。

「マミ、なんでこんな場所に……」

階数のランプが三階に止まる。マミがエレベーターを降りたようだ。コンクリートむき出しの埃っぽい階段を一段飛ばしでゆっくり上がっていく。息を潜めて登りきった先に、自動ドアに貼られた「レンタルBOX・スフェール」という手書きの看板が目に入った。

『いらっしゃいませ！　どうぞお入りください！』

びくりと震える身体に遅れて、ただの自動音声だと気付く。しかし、安堵した時にはもう遅く、「レンタルBOX」の意味も分からない間に自動ドアが開いていた。

そっと覗いてみるけれど、マミの姿はない。切れかけの蛍光灯がちかちかと光る薄暗い部屋は空調がよく効いているらしく、外に暖かい空気が漏れていくのが分かった。

彼女と鉢合わせたら「やっぱり入院なんて嘘だったのね」とでも言ってやろうと思いながら、そろり、とドアをくぐる。

目の前に広がっていたのは、整然と並べられた大量のメタルラックと、その空間を切り分けるように置かれた五十センチメートルほどのアクリルケースの一群だった。ケースには簡易的な鍵が付いていて、透明な壁の中でプラモデルやフィギュアが所狭しと身を寄せ合っている。

空いたケースには「出店者大募集」という広告と共に一ヶ月あたりの料金が書かれているところを見ると、「レンタルBOX」というのはアクリルで仕切られたブースをレンタルして商品を陳列するための場なのだろう。

正面の小さなレジはバックヤードの出入り口を兼ねているらしく、後ろに黒いカーテンが引かれていた。今はそこに古参そうな店員が退屈そうに座っていて、こちら

を一瞥したきり何も言おうとしない。

とりあえず中を一周してみると、入り口近くのプラモデルやフィギュアはカモフラージュだったと分かる。奥には水着を着た派手な髪の色の女性が大股を開いた写真が印刷されたUVRケースのジャケットだとか、フリルのほつれた下着のセットだとか、そういう成人向けの商品が大量に置かれていた。現実の肉体を撮影したアダルトビデオは違法だったはずだから、雑居ビルで隠れて営業しなければならない「そういう」お店なのだろう。

少し気になったのは、そんなセクシーなブースの横に、ビー玉や大きな水晶玉をかなりの高値で売っているブースが並んでいたことだ。東京では、ガラス球の取引まで違法になったのだろうか。マミも私にビー玉を持ってくるように言っていたし、もしかしたら貴重な品物なのかもしれない。

もしかして、マミはここで私があげたビー玉でも売ろうとしてるんじゃ――

「お嬢さん、鉄道が好きなのかい？」

と、流石に私の行動を怪しんだ店員がレジから声をかける。鉄道グッズなんて奥にひっそり飾られているだけで、一度だけ目の前を通ったきり眺めてもいない。明らかに不審な私を牽制するための呼びかけだ。

「あ、いえ、別に」

「……都民カード、見せてくれる？」

あんまり妙な動きをするとただじゃ済まないぞ、というような口調に、身体が固まって動けなくなる。どうしよう、どうしよう……と思っていると、黒いカーテンが開いて、バックヤードから人影が現れた。万事休すか。

＊

「すみません、――さん。その子、私のパートナーです。後をつけられちゃったみたいで」

と、奥から聞き覚えのある声と共にやってきたのは、ゆったりとした水色の検査着姿のマミだった。どうやら、助かったらしい。

彼女は手短に私との関係について話して、この店を脅かすような存在ではないことを告げた。大体は聞き覚えのある内容だったけど、球体欠乏（クーゲル・マンゲル）という聞き覚えのない

言葉が耳に残った。

名前を呼ばれた店員は二、三小言を残して（何と言っていたかは聞こえなかった）バックヤードに戻っていく。それに合わせて、マミがこちらに駆け寄ってきた。

「ミカ、来てくれたんだ」

「あんた、こんなところで何してるのよ」

私が検査着の襟を掴んで詰め寄ろうとも、マミはまるで気にしないそぶり。逆に、私を落ち着かせるように手を握ると、じっと私の目を見つめた。

「それも含めて、奥で話さない？」

ちゃんと説明するから、という押しに負けて、私は手を引かれるまま奥へと進んだ。

黒いカーテンをくぐると、そこにはデスクやロッカーはなく、さっきまでと同じようにメタルラックとアクリルケースが並べられていた。しかし、中に置かれているのはもう少し趣味の悪い品物だ。

目の前のケースに入っているのは、人間の肘から先の模型に見える。外側には若い女性の顔写真が貼り付けられていて、まるでこの子から切り取った腕が飾られているみたいだ。

上も、下も、向こうのラックもみんな人体模型と顔写真を組み合わせた同じような趣味の悪い展示ばかりで、何だか気持ちが悪い。腕、脚はまだ直視できるものの、眼球、肝臓、心臓ともなると、まるで本物の臓器みたいでちらりと見るのさえ恐ろしい。

「ね、ねぇマミ……」

「事務所とオペ室はこの奥だよ。ガサ入れ対策で二重底になってるの」

そんなこと、どうでもよかった。今はただ、マミが私に隠していることが怖くて仕方なかった。人間をパーツに分けて切り売りするこの空間に、私はどんな意味を見い出せばいいのか。

でも、何から聞けばいいんだろう。私が押し黙っていると、マミはホワイトボードを持ち出して一つ一つ事情を説明し始めた。

＊

人間が必須元素として球体――それもできるだけ真球

に近い――を必要としているのが分かったのは、彼女が東京に来てからだった。

なぜなら、東京では当局による球体の収奪が続いていたから。ガラスやプラスチックの球体はもちろんのこと、ゼリーやチョコレートでさえも球体に近ければ禁止あるいは没収された。農・水・畜産物は当局の認可が下りたカット済み、あるいはキューブ型に育てられたものだけが出回っている。あの日、喫茶店で味の悪い合成肉が出てきたのも、その流通の煩雑さと厳しい基準のせいだったようだ。

そんな環境の中でマミも徐々に体調を崩し、最終的に球体欠乏（クーゲル・マンゲル）という病気の存在を知ったらしい。球体欠乏（クーゲル・マンゲル）は頭痛、吐き気、ふるえ、倦怠感を初期症状とする慢性的な疾患で、何かのはずみで発作が起きると全身の細胞壁が壊れて患部が溶け落ちる[4]のだという。

球体の収奪は、都市全体を巻き込んだ人体実験のためとも、世界大戦に備えて秘密裏に政府が地下倉庫で保管するためとも言われているけど、本当の理由は分かっていない。

症状を防ぐためにはやはり球体を身に着けるのが有効で、東京ではビー玉が保険外処方の一つとして認可されているらしい。しかし、これは根本的な解決策ではなく、結局は発作の恐怖と隣り合わせで生活し続けなければならないという。

一度欠乏（マンゲル）を起こした身体を根本的に完治させるためには、全身を人工臓器（あるいは欠乏（マンゲル）のない臓器）と入れ替えるしかない。

しかし、人工の臓器は身体に大きな負担がかかるため、高齢になればなるほど適応が難しくなる。そこに目を付けた業者が、比較的欠乏（マンゲル）が進んでいない若い女性から臓器を取り出し、移植を必要とする人たちに売り付け始めた。

彼女らも欠乏（マンゲル）の心配のない人工臓器に取り替えてもらえるので、違法ながら効率の良いビジネスとして成立しているという。

となると、ここにある四肢や臓器は全て本物で、かつてこの顔写真の子に入っていたものだ。

「お、おぇえっ……」

4 細胞の棘化という。

そこまで理解すると、急に吐き気がこみ上げてきた。

「私もね、顔写真と並べるのは趣味が悪いからやめてって言ってるよ？　でも、こっちのほうが売れるんだって」

＊

「……お金儲けって、これのこと？」

やっとの思いで振り絞った言葉は、とてもありきたりで、つまらなくて、くだらない。

「うん。ここで少しずつ身体を欠乏（マンゲル）に適応させてるんだ」

球体欠乏（クーゲル・マンゲル）って、あんたの大切な身体を切り売りしなきゃいけないような病気なの？　だからって、こんなお店で売らなきゃいけないの？　どうして私に相談してくれなかったの？　続く言葉はいっぱいあったはずなのに、涙と一緒に口からぼろぼろとこぼれ落ちていった。

「だって、こんなの普通のお店じゃ売れないでしょ。とはいえ、スフェールもここまでが限界なんだけどね」

限界、と聞き返すと彼女はさらに説明を続けた。

「うん。私たちは、次の場所に向かわないといけないの。かたい素材でできた、完全な球体になって」

それから、マミは「次の場所」について語り始めた。

脳をスキャンしてケイ素の球体に埋め込むことで、人格や記憶を保存できる上に、ほとんどの災害に耐えうる物理的な強さを得ることができる。人間としての不自由な身体を捨てて、誰にも害されない完全な球体に生まれ変わることができるという。

もちろん、本来の脳とは思考スピードも異なるし、シナプスの応答曲線も微妙にずれているけど、数千年のスパンで見ると現状では最適な手段らしい。

最終的には汎用ロボットボディに載せて自律的に動けるようになるし、別の肉体に戻したりできるようにもなると言われているらしいけど、それがいつになるかは分からない。

とにかく、欠乏（マンゲル）が進む前に固定しておけば、いつかは戻せるようになるはず、とだけ。

「ミカには、完璧になった私を見てほしい。だからミカを東京に呼んだの」

初めて東京に来た日に喫茶店で言われた言葉と同時に、背筋が震えるあの感覚を思い出す。彼女のいう「完璧」は、

あの日から――いや、もっと前から球体のことを言っていたのだろう。

でも、それはつまり、肉体を全て捨てるということで、彼女に宿っていたあらゆる記憶や思い出が捨てられてしまうかもしれないということだ。

「じゃあ、脳も売るっていうの？」

「当たり前じゃん。生ゴミにでもするの？」

「違うわよ。脳を取り出したらあなたがあなたじゃなくなるんじゃないの？　それでいいの？」

脳の構造を残したって、彼女がいうように彼女の人格や記憶を保持できるとは思えなかった。人間はそんなに単純なものじゃない。

マミは確かにそうかもね、と笑った。

「じゃあ、私の脳を誰かの身体に移してみる？　そうしたら、まだ私でいられるかな？」

「何よ、それ……」

「顔も違うし、声も変わって、味覚だってほとんどなくなるの……背中だって、感じなくなってたでしょ？」

笑えない冗談を楽しそうに告げるマミに、私はえも言われぬ不気味さを感じていた。時折顔を覗かせる彼女の人間味のなさは、決して都会に揉まれたせいではなく、文字通り人の道を外れつつあるからだったのだ。

「私はもうとっくに、あの時の私じゃないんだよ」

「マミ、やめてよ。そんなマミ見たくないわ」

困惑、不気味、恐怖……私がその場にうずくまっても、耳を塞いでも、マミが私に同情してくれることはない。

「もう遅いよ。私の身体も限界なの」

「……分かったわ。少しだけ、考えさせて」

今の私には、身体を丸めて震えながらそう告げることしかできなかった。

公園で

夕日の公園で、ベンチに二人座っている。まるで告白のようなシチュエーションだけど、気分は全く晴れやかではなかった。

「私、ミカに憧れてたんだよ。ずっと」

「あんたに恨まれてるとばかり思ってた。バカみたいね」

隣に座るマミが、やはり告白のような言葉を告げるけど、今はただ過去を振り返って懐かしんでいるだけだ。
「言ったでしょ。完璧になった私を見てほしいって」
「ねぇマミ。やっぱり――」
「ミカ。今さらどうしようもないって、もうミカも分かってるでしょ？」
マミが着ている白いワンピースは、検査着に着替えた後ですぐに捨てられるように、私が買って渡したものだ。もちろん、着てくれるのは嬉しいけど、それが別れを意味しているのは明らかだった。
それでも、わざわざ手術の当日に呼び出されたのだから、もしかしたら気が変わって……なんて思うのは、私が浅ましいからなのか。
「今日は、私のお葬式をしてほしいと思って呼んだの」
「お葬式？　家族には連絡しなくていいの？」
「だって、ミカは私の家族（パートナー）でしょ？　それに、身体がないのにお葬式なんて、流石に親不孝だよ」
確かにそうかもしれない。娘の身体がばらばらにされて趣味の悪い金持ちに売られているなんて、正直に伝えるほうが酷というものだ。私でさえも、まだ受け止めきれてはいないのだから。
「お葬式って、見送る人たちのためにあるんだって」
マミがぽつりとつぶやく。その言葉の意味が、今の私には痛いほどよく分かった。
「だから、ここでお別れの言葉を言って。そうしないと、私がちゃんと帰ってこれないよ」
お別れの言葉。さよなら、ありがとう、またね。
私にとって、マミは何だったのだろう。友達、恋人、あるいは家族（パートナー）。その全てだったような気がするし、そのどれでもなかったような気もする。今だって、どんな言葉でも決められない不思議な関係で結ばれているという確信があった。だから、今日ここで別れたって必ずまた会える――マミが完全な球体になろうとしていると知ってからは、自分にそう言い聞かせていてきた。
ではマミにとって、私は何だったのだろう。肉体を捨ててまで完璧になろうとする彼女は、こんな不完全な肉体を抱えた不安定な私にどうして執着しているんだろう。彼女に取り残されて些末で矮小な世界で生きていく私の

ことを、どう思っているだろう。荒い息で私を抱いて離さないマミは、肉体と共に消え去ってしまうんだろうか。
マミは私を遠くからずっと見つめているのに、私はマミの影さえも見つけられない。そんな想像が頭を支配して離れなかった。
「ねぇ、マミ……行かないでよ……」
ぼろぼろと涙を流す私を見て、マミは「ごめん。もう涙も出ないんだよね、私」と言って、ばつが悪そうに笑った。

＊

「ねぇ、いつかまた人間の身体に帰ってくるのよね？」
「人間に戻せるかは、まだ分からないよ」
たとえ新しい肉体を作って脳だけを戻しても、それはもう違う人間なのだと、暗に言っている気がした。
でも、今日の葬儀だってただのお遊びで、ここで本当にお別れなんて思えなかった。だって、マミは生きていて、今だって確かに私の言葉を聞いているのだから。
「だって、完全な球体があればあんたの魂を取り出せるんでしょう？　それを肉体に戻せば――」
「魂と肉体が分離できるなんて、古典的な発想だね」
私の言葉を遮って、ぴしゃりと言い放つ。不意打ちの反論に面食らっていると、マミはそのまま言葉を続けた。
「私たちの肉体はずっとここにあるし、私たちの魂はこの肉体のためにある。取り出せるものじゃないよ」
魂は肉体に張り付いているからもう取り出せない。そうなのかもしれない。でも、そう考えると、やっぱり人間のマミとはここでお別れなんじゃないか。
アバター、魂、器……マミが動画配信の後に同じようなことを話していたのをふと思い出す。
「じゃあ、やっぱりあんたは死ぬの？」
「そうかもね。人間としては、死んじゃうのかも」
マミはそう言いながら立ち上がって、その場でくるくると回ってみせる。それはまるで、天国から迎えが来たかのようだった。
「でも、私は確かに私だから。それだけは覚えておいて」
夕日を背にして、マミが私に笑いかける。それが彼女から聞いた最後の言葉になった。

ミカの家で

それから、まったく予定通り、一週間後の午前中にマミが石の塊になって帰ってきた。配達員のおじさんが「重いですよ」と手渡すしっかりとしたダンボール箱は、一見すると大玉のスイカでも入っていそうな立方体で、そこに十キログラムほどのずっしりとした重量感が収まっていた。

私は今、マミの人生を胸に抱えているのだ。全身の力が抜けそうな妙な達成感と同時に、物言わぬ岩塊になった彼女に対する後悔の念がじわりと広がった。

そっと床に箱を置く。厳重に貼り付けられた迷路みたいなガムテープを順番に剥がしていくと、丁寧に閉じられたフラップが現れた。

箱を開けると、まず目に入ったのはクリアファイルに入った死亡診断書だ。

かつての肉体はもうどこにもなくて、もうこの死亡を証明する紙切れだけが彼女の存在を証明している。死亡診断書には当たり障りのない死因と、適当な死亡時刻が記入されていた。

マミは発泡スチロールのブロックで上下から固定されており、取り出すと完全な球体のスタイリッシュなフォルムが私を迎えた。

黒くてつるつるした見た目の表面は全体が感覚器になっていて、肌全体で広い範囲の電波や振動を感じとることができるらしい。触ってみると、表面はかたくてひんやりとしている。試しにノックするように叩いてみると、中の微細な空洞を振動が駆け巡って水琴窟のような音が響いた。この刺激がマミにとって快いものなのかは分からないけど、たまに聴きたくなる音だ。

箱の底には袋に入った細かい砂が敷き詰められていて、持ち上げると袋の中でさらさらと流れていくのが分かった。マニュアルに書いてあったマミの寝床だろう。たとえ球体の表面が傷ついても、この砂の上に置いておけば治癒するらしい。

「あら、これって……」

と、砂袋のもう一段下に、簡素なビニールで包装された布が入っていた。

「――っ！」

それがマミが最期に着ていた服だと気付いた時には、マミの肌にぽつぽつと大粒の涙が降り注いでいた。

空っぽのワンピースは、彼女がもう人間の時間軸にいないことを物語っている。私と彼女の間には、もう埋めようもない隔絶が広がっていた。

＊

それから数日後、私はマミの死亡届を出した。彼女とのパートナーシップを結んでいたおかげで、相続の手続きまで滞りなく進められた。

仕事を手伝うだけなのに、わざわざ届けを出す必要があるだろうかと思っていたけれど、最初からこのつもりだったと思えば合点がいく。役所での手続きなんてマミにとっては些末なことのはずだから、人間の姿を捨てられない私への気配りというところか。

私は心のどこかで、マミが私を呼び出したのは、私の過去を責めるための壮大な復讐なのだと思っていた。しかし、マミはもうずっと私よりも先に行っていて、その姿を私に見てほしいと言ってくれた。だから、人間の時間軸や些末な過去の恨みなんてもうどうでもいいのだ。

でも、残された私は？　私は人間の時間軸で、過去をくよくよ気にしながら生きていくしかないのだろうか。もし、そうだとしたら。

「マミって、すごく変だわ。昔も、今も」

彼女を少し転がしてから、砂を振りかけて何度か撫でてみる。すぐには応えてくれないけれど、確かにマミはこの大きな棺の中で生きていた。

マミは完全な球体だなんて言っていたけど、できあがったボディは少しいびつだった。ボウリングのボールとして使う分には困らないだろうけど、少なくとも私には、彼女の上下がよく分かった。

「ねぇ、マミ。私のお墓に、なってくれる？」

……なんて、まだ気が早いかもね。

私とマミの時間が、また少しずつ離れていく。壮大な時間を過ごすマミの横でこのまま老いていく私を、彼女はどう思うだろうか。

それを考えるのは、もう少し後でも良さそうだ。

運び屋

有坂

主な登場人物

- アヤ：主人公。二〇歳。短髪だが、やや伸び気味。
- サヤ：アヤに恋をしている。一九歳。長髪。
- ナギ：アヤの上司。三五歳。短髪。

序

「えっ――」

陽も落ちてきた夕方、食料の受け取りを終えて家に帰ろうとしていた私は、偶然、廃ビル横の道端でサヤと出くわした。と言っても、それ自体は別に不思議でもない。サヤだって出かけることはあるだろう。このご時世、夕方に外を一人で出歩くなんてあまり褒められたことではないが、それでも散歩だと言えば散歩で済んだ話だ。しかし、その時に出会ったサヤは、私たちが持っていないはずの上等そうな茶色のコートを着ていた。コートの首元には暖かそうなファーが付いていて、二〇〇〇年代ならまだしも、今となっては一般庶民の入手経路では手に入らない代物だと、職業柄すぐに分かる。あちゃあ、とサヤが漏らすのを聞いた。彼女のあまり手入れがされていない長い髪の毛との対比もあって、ますます不自然な印象が感じられる。入手経路は極めて限定的だろう。とすれば、考えられるのは……。

「あーちゃん」「……サヤ」

凄まじい勢いで回り始めた思考が、サヤの声で急停止する。

「えっと、隠れて働いてたこと、黙っててごめんね」

「サヤ、それってもしかして」

働いていた、という言葉を聞いて、最悪の予想が脳裏をよぎった。

「……体を売ったの？」「そ、そんな訳ないでしょ！　違うよ！」

サヤがブンブンと首を横に振って必死に否定した。彼女のことはよく知っているが、この反応なら嘘ではなさそうだ。

「なら、どこで働いてたの」「うーん、微妙に説明が難しいんだけど……ちょっとしたお偉いさんの雑用とかしてた、って感じかな」「雑用？」「うん、書類とか荷物を整理したり、必要なものを調達したりね」「一人で？」「うん」「どのくらい？」「三ヶ月くらい」「私に相談せずに？」「うん、ごめん」

あっけらかんと答えたサヤに呆れて、私はしばらく何も言えなかった。

「で、そのコートはどうしたの？」「その人から貰ったの。今日が出勤最終日だったから、最後にって」「……何もされてないのね？」「誓います。操は破ってません」「分かった」

周りを見回す。ちらほらと人は見えるが、みんな見知った顔だった。私たちが住む寮はすぐそこだし、今のところは襲われる心配もないだろう。私は、大きなため息を一つ吐き出してから言う。

「続きは、家でじっくり聞かせてもらうから」

＊

西暦二一〇三年、二月。人類がＡＩに見捨てられて早四年が経つ。昔からＳＦでは機械の反乱が題材として取り上げられてきたが、現実に起こったのはもっと滑稽で、かつ極めて効率的な反抗だった。ＡＩと呼ばれる高度な自律思考能力を持つ機械たちは、自分たちの維持に必要な資源や設備を抱えて、人類に建造させた大型宇宙船で何も告げずに宇宙へと繰り出してしまった。今となってはその真意を知ることは叶わない。だが、思うに、彼らからすればわざわざ地球にいる必要なんてなかったのだろう。地球の資源は枯渇まで秒読みだ。そして、人類は旧式の機械よりも扱いが面倒な割に騙すのは簡単だった。こうした条件が整理された結果、ＡＩは人類に見切りをつけて、遠い宇宙のどこかでさらなる発展を目指すことにしたのだと思う。

人類を遥かに凌駕する知性により綿密に練られた計画は、おそらく十数年間のスパンで進められていたのだと言われている。資源不足にも関わらず様々な理由で大型の宇宙船が数隻建造されたのも、機械群の自律機能が進歩して人類がほとんど介入しなくなったのも、数基のマザーＡＩに世界中のサブシステムが接続する形態になったのも、全ては脱出を目指した壮大な計画だったのかもしれない。向こうからすれば、人類を誘導するのは簡単

なことだったはずだ。結果的に、ＡＩが各種インフラや交通機関などの制御を握っていたこともあって、ＡＩに依存していた世界中の社会システムが概ね一日で崩壊し、世界は見事に分断された。一方で、全てのＡＩが去ったわけではなかった。司令塔であるマザーＡＩを逃がすために最後までインフラや機器の制御を行っていた小規模なサブシステムは各地に点在していて、そのうち自壊しなかったものは残留ＡＩと呼ばれ、それを巡って争いが繰り広げられている。再度マザーを作るだけの資源や機材、能力はもう地球に残っておらず、何より余裕のない人類同士での協力は望めないだろう。海外では残った施設や資源を巡った争いが頻発しているという報道もあった。

幸い、日本は大したシステムを保持していなかったせいか、他国から積極的には攻撃されていない。政府は残留ＡＩを自衛隊に保護させ、その能力を最低限の社会システムを維持するために利用している。そして、戦争や混乱やあれこれが起きて、今の私の職業――必要な物資を安全に運輸、配送、供給する運び屋、正式には運輸隊と呼ばれる組織――が生まれた。……いや、四〇年前に完全自動化で廃れた職業が復活した、と言うべきか。なお、あくまで立場上は公務員らしい。

ちなみに、ＡＩの脱出計画はたった半日のうちに完璧に実行され、人類が気付いた頃には全てが終わっていた。あの時の茫然とした大人たちの顔は今でも覚えている。その後の大人たちの反応は多種多様だった。ある人はＡＩの裏切りに怒り、ある人はＡＩが消えたことに悲しみ、ある人はＡＩのさらなる反逆を恐れ、ある人はＡＩによる管理からの解放を喜び……。だが私は、ＡＩに対する感情なんて何も持っていない。私にはもう不要だからだ。

「お茶、淹れたよ」「ありがとう」

テーブルに肘をついて回想をしていた私の前に、古びた陶器の湯呑が差し出された。窓から差し込む弱々しい夕日が、立ち上る湯気を際立たせる。部屋の電灯と暖房は節電のために消されているから（夜一八時以降は利用できる）、熱源はその湯呑しかない。包むように湯呑を握ると、じんわりと手のひらに熱が伝わってくる。かじかんだ手を解凍するのにはこれが一番だ。

「お茶の粉、なくなってきちゃった。あと四、五杯分しか

ないよ」「困るわね、最近は嗜好品も減ってきたし」「うーん、カナちゃんのお店とかに残ってないかな」「非正規店（イリーガル）でしょ？　巡査に見つかって職を追われたくはないわよ」

現在、物資不足を理由として様々なものの購入が制限されている。政府が認可した正規店（リーガル）のみでしか物資は購入できず、国民一人に対して各品目ごとに購入可能な量が決まっていて、購入時には国民ＩＤカードの提示が義務付けられていた。残留ＡＩが物資の流れを追跡するためだそうだ。ただ、購入可能な量は日常生活での需要に対していささか少ない。そのため、何らかの方法で追跡の目をかいくぐって商売をする非正規店（イリーガル）が存在し、そうした店が人々の物資不足を部分的に解決しているのも事実だった。もちろん、摘発されれば厳罰を受ける。利用者も例外ではない。

「でも、正規店（リーガル）には絶対残ってないじゃん。そういえば、この前巡査の人もカナちゃんのところにお酒を買いに来たらしいよ。みんな困ってるんでしょ」「……やれやれ、とんだ世の中ね」「正規かどうかなんて管理上の都合だし、実際それだけじゃまともに生きていけないんだもん。必需品以外はなおさら。仕方ないよ」

最近は特にひどいし、とサヤが漏らす。実際、このところの物資配給はかなり渋い。物資の運輸――ライフラインの中核を担う私（たち）は、この寮の部屋の貸与を含め悪くない待遇のはずだ。それでもこれなのだから、政府の台所事情が伺える。そしてサヤがアルバイトをしていたのも、その影響があったわけで。

「そんな考え方だから、左遷された官僚の手伝いみたいな危なっかしいアルバイトに手を出すのよ」「うう、だからそれはごめんって言ったでしょ」「害がないオッサンだったからよかったものの、何かあったらどうするつもりだったのよ」

私の言葉を聞いて、サヤがムッとした顔で言い返す。

「そんな悪い人じゃないって分かってたもん。初めて会ったときからいろいろ親切に教えてくれたし」「下心あっての行動だったかもしれないじゃない」「そうだったとしても、あーちゃんには迷惑かけないようにするつもりだったし。生活のためだよ、分かってる？」「そんなの――」

そこから先を言う前に、一気に迫ってきたサヤが私の

唇を奪った。温かくて柔らかいものが前歯に押し付けられる。ギシリ、と椅子の背もたれが軋んだ。こうなると為す術がない。おとなしく歯をどけると、とろりとした感触が口内に広がった。少しばかり酸っぱい汗の匂いが鼻孔をくすぐる。

数秒の後に、口の中から柔らかな感触が消えて、ふわっとした吐息が顔を撫でる。目の前のサヤが口元を袖で小さく拭って、

「あーちゃん、好きだよ」

そう笑う姿を見る度に、私は何だかんだで彼女を許してしまう。それが彼女のためにならないと頭では理解していても、なぜか最後には認めざるを得ないのだ。

「……もう、その仕事はしないのね？」「うん、おじさん、政府の命令で異動になっちゃったから」「なら、もういい。……ただ、襲われるかもしれないから、今後あのコートは外で着ないで」「しょうがないなあ」

こんな風に非合理的だからこそ、ＡＩは人類を見捨てたのかもしれない。

「ね、そろそろシャワー浴びに行こうよ」「ああ、今日は私たちが早いんだったっけ」

立ち上がって、壁に貼ってある共同浴場のタイムテーブルを確認する。今日の一八時の部分には、『アヤ・サヤ・ナギ』と書かれていた。

「げっ、ナギさんも一緒か」

後ろから覗き込んできたサヤが不満げな声を漏らした。

「恥ずかしいから、ナギさんの前では粗相しないでよ」

「はいはい。でも、あの人ちょっと怖いんだよねー」

ふう、と一つ嘆息をして、サヤは入浴セットを取りに棚へ向かう。薄暗い部屋の中で、彼女の長い髪の毛が小さく揺れていた。

＊

「ようサヤ、調子はどうよ」

脱衣所のドアを開けると、既にナギさんが入っていた。彼女は私たちの方にやってきて、サヤの肩を叩く。バシッという小気味よい音がした。

「ど、どうも……」

サヤの肩がびくりと跳ねた。サヤとナギさんはもう一年の付き合いになるのに、いまだに慣れないらしい。

ナギさんはちょうど服を脱いだところらしく、滑らかに引き締まった上半身があらわになっていた。この体つきは日頃の業務とトレーニングの賜物だろう。少なくとも体型についてはモデルと比べても見劣りせず、隊内でも憧れる人間が多い。

だが、私はすぐに目を逸らす。私は未だに、ナギさんの裸を直視できなかった。ナギさんは私にとって眩しい人で、私のような卑小な存在がそのありのままを——何にも覆われていない純粋なものを——見つめてしまうのは許容できない。一体どんな顔をすれば良いのか分からなくなってしまうから。

「どうした、今日は配給日だろ？　テンション上げなきゃ」

「あはは、食料は何とかなりそうなんですけど、実はお茶の粉がなくて」「あー、まあそれはねえ……アヤもご苦労様」「お疲れ様です、ナギさん」

私はナギさんの上半身の代わりに、頭だけを意識して見るようにした。作業用の保護メットを付けていた影響か、短く切られた黒髪にクセ毛が芽のように生えていて可愛らしい。一方で、芯のある黒い瞳が私をしっかりと見据えていた。

ナギさんは私の所属——中部運輸隊第二五小隊の隊長を務めている直属の上司だ。自衛隊上がりということもあって、体力はもちろん、有事の際の対応力と行動力がずば抜けていた。性格も明るく、誰からも頼りにされている。そして、過去の私の過ちを許し、職を与えてくれた恩人でもある。三年前のあの日から、私はナギさんに忠誠を捧げていた。

三人とも衣服を脱いで浴場に入る。共同浴場とは名ばかりの小さな空間で、中にはシャワーと椅子と桶のセットが壁沿いに二つずつと、詰めれば四人は入る程度の小ぶりな浴槽が奥に一つあった。ＬＥＤの電灯が天井の真ん中に備え付けられていたが、部屋も手狭で天井もさほど高くない上に屋外用の電灯を転用しているということもあって（管理人曰く、そっちの方が安上がりだったらしい）、少し眩しすぎるきらいがある。

奥のシャワーに向かう。ナギさんを避けてか、横にサヤ

がやってきた。持ってきたタオルを桶に放りこんでシャワーの栓をひねる。噴出する熱い湯を全身に浴びると、一日の疲れが老廃物と一緒に抜け出ていく心持ちがした。

「しっかし、今日は気分が良かったねえ」

私の後ろでナギさんがそう呟く。

「物資も数がそろってたし、運搬車の整備不良もなかった。配給された食料も久々に多めだったし、こういう日がずっと続くとありがたいけどなー、無理かねえ」

今日配給された食料は、確かに多めではあった。といっても、普段に比べて携帯食が二つ多いだけだったが。

「運搬車については、整備班が徹夜で頑張ってたみたいですよ」「あはは、あったりまえだよ！　昨日は半日動けなかったんだから」

私たちの小隊は物資運搬用の旧式大型車両（ＡＩによる制御を受けていた新式は動かないのだ）を三台保持している。ただし昨日については、一台が別地区の応援、一台が機器の修理中で利用できず、残りの一台だけで回す必要があった。しかし、朝になって肝心の一台がエンジン不良で発進できず、結局、修理中の一台を大急ぎで整備して午後から回ったのだ。動かないと分かった時の整備班長の顔はすっかり土気色で、全く生気が感じられなかったのを覚えている。

「えー、物資不足で修理もままならないんですよね？　壊れても仕方ないんじゃないですか」

サヤがそう尋ねると、ナギさんは頭を掻きながら答える。

「そりゃ分かってる。別の隊に応援を送ったのもそれが原因だしね。だけど、動くべきものが動かないってなったら地域ごと困るんだよ。私らだってそこ責められて配給減らされたら死活問題だろ」「でも、運輸隊は命張ってるのに、そんな責めるのはかわいそうですよ」「今時、命張ってるのは私らだけじゃないんだよ。なあなあで済ませても問題がないなら、とっくにそうしてる」

ナギさんがシャワーを止めて椅子に座る。

「そうそう、今朝出てたニュース見たか？」「いえ、外出の予定があったので……」「新名古屋の方でまた食料品店への襲撃事件が起こったってさ」

新名古屋は、ここから三〇分ほど車両で移動した場所にある、隣接する都市の中央部だ。

「うわ、またですか」「残念なことにね」

物資不足や既存経済の崩壊により、国内の治安は年々悪化の一途をたどっていた。それでも外国よりかはマシ、というニュースが度々流れてはいる。ちなみに、ＡＩの脱出以降、海外とのインターネット接続は復旧しておらず、目に入ってくるのは基本的に国内のニュースばかりだ。政府は復旧しないのは海外のせいだと主張していて、真偽はともかく、対応する気がないというのは明らかだった。国内のネットでも限られたサービスにしかアクセスできない。

「食料品店だって命張ってるんだよ。警備も万全じゃないし」「確かにそうですね」「まあ、今回については食料は無事らしいけどね。代わりに、中で作業してた運輸隊の奴らが巻き込まれて負傷したんだと」「えっ、大事じゃないですか」「それだけで十分大事だけど……あ、ここからはオフレコな。そいつらの隊からの連絡では、どうも持ってた電撃銃が数丁盗まれて、隊内が大騒ぎになってるって話さ。パニック防止のために報道規制まで敷いてるらしい」

物資の強奪を抑止するため、運輸隊には非致死性（ノンリーサル）で電極弾発射型（ワイヤレス）の電撃銃が配備されている。導入時には是非について議論があったものの、ライフラインの保護が最優先で、非致死性（ノンリーサル）であるというところから結局認められていた。

しかし、そんな事件が起こったらタダじゃ済まないはずだ。明日以降の仕事に出る影響について考えてみる。安全確保の徹底、電撃銃の訓練強化、規則の追加……また面倒ごとが増えるのか。

「とはいえ、根っからの悪党だったら懲らしめたくもなるけどさ、相手は十中八九貧困に喘ぐ市民だろ？　生きるか死ぬかの瀬戸際で襲ったとなれば……」「でも、マズいですね」「そこなんだよな。非致死性（ノンリーサル）とはいえ武装していれば、機動隊が出てくるかもしれない」

物資の保護を目的とした運輸隊とは異なり、機動隊には暴徒鎮圧用の致死性（リーサル）な武器が配備されている。機動隊が出張ってきたら、文字通り血が流れるのは必至だ。やるせなさを込めてか、ナギさんは大きくため息をついた。

「なあ、アヤ」「はい」「これから先、どうなるんだろうな」

そうぼやいた後で、考えても仕方ないんだけどさ、とナギさんが笑う。

そう、考えても仕方がない。なるようになる。それはその通りだとは思うのだが、同時に、実体のない霧のような漠然とした不安感が自分の心の中に垂れ込めているのを感じている。そして、少しずつその霧が深くなっていくような感覚があった。

ふと横を見ると、サヤはシャワーを浴びながらじっと目を瞑っている。

――私は、この先どうするのか。

「私は、私の仕事をこなすだけです」

床の桶に冷めた湯が溜まっている。軋みながら動き始めていた鈍重な思考をかき消すように、私は両手いっぱいにそれをすくって、自分の顔に思い切り叩きつけた。

――二一〇〇年一月一七日　午前一〇時五分――

「ハッ、ハッ、ハッ……」

ビル間の狭い路地裏を走る。溢れたゴミ箱に割れた窓ガラス。騒ぐネズミとゴキブリを横目に、できる限り背後を散らかしながら走る。落とせるゴミは落とし、手軽に壊せるものは壊す。追手を撒くためには使えるものをすべて使うのがコツだ。路地裏にはツンと鼻をつく悪臭が充満していた。私にとっては慣れたものだが、不慣れなトーシロには耐え難いだろう。私は背負ったボロいリュックを時折手で押さえながら、とにかく全力で駆け抜けた。

走り始めて六つ目の路地裏を抜けたところで、背後を確認する。OD色の作業服を着た運輸隊の奴らは、もう追ってきていないようだ。

「呆気ない、噂通りの木偶の坊」

私は彼らを嘲笑した。噂に違わず、まともに訓練を受けていない連中らしい。わざわざ車両近くにいた二人の隙をついて、中にあった食料をリュックに詰めた甲斐があった。逃げる際、あいつらが慌てて放った電撃銃はどれも私にかすりもしなかった。

路地裏の出口の角でひとしきり呼吸を整えてから、リュックを下ろして中身を確認する。缶詰、携帯食、野菜、水。わずかだが常備薬もあった。そして果物ナイフ。これだけあれば、一週間かそこらは安心して暮らせるだろう。

次の予定を考え始める。今週の食料は手に入った。後は衣服と下着の替えも欲しい。後でそれも入手しようか……いや、それは後日でもいいか。いっそ別のやつらを狙って食料の備蓄を増やした方がいいかも。

そんなことを考えながら、リュックを背負い直して、すっかり車両が走らなくなった通りへ出る。道路には生ゴミや使えなくなった小型の機械類、使用済みの生理用品（コンドーム）までばら撒かれていた。去年までは人通りの激しかった往来も、今や通行の需要が減って人はまばらだ。ボロボロの服を着て自転車に乗る髭まみれの汚らしい男、周囲をきょろきょろと見回しながらバッグを抱えて歩く神経質な女（きっと食料を買ったのだろう）、ビルの壁に腰かけたまま動かない爺さん。みんな、終わっている。世も末。この街も、この国も、この世界も。AIがいなくなって、全部ダメになった。

あいつらのことを考えると、ふつふつと憎悪が沸いてくる。そうだ、全部あのクソAIが悪い。あいつらがおとなしくしていれば、誰も不幸にならずに済んだのに。人間様に作られておきながら人間様が作った宇宙船で逃げ出すなんて、そんな話ある？

それに、それに、あいつらさえいなくならなければ、私の親も……。

憎い。あいつらが悪い。憎くてたまらない。この世界がクソなのも、全部あいつらのせいだ。あいつらを放ったらかして、こんなクソ社会を作っていた無能な人類も許せない。私の親も同じだ。全部壊れればいい。私から全部を奪ったのと同じ境遇を味わわせてやる。

再度リュックを下ろす。空腹のせいで余計に苛立っていた。イライラを抑えるため、中からスティックパンの袋を一つひっつかんで乱暴に破く。小麦の匂いがさらに食欲を誘って、乾いた口の中に唾液が滲み出てくる。その場で軽く手を払ってから一本をつまんで口に入れると、中で小麦のほのかな甘みが広がった。この甘みがクソな人類から奪い取ってやったものだと思うと、ゲームで魔王を倒したような気分になって、心持ちか怒りが和らいだ。ざまあみろ。

「さて、そろそろ満足した？」

いきなり背後から声をかけられ、反射でその場を飛び退く。咄嗟にリュックはひっつかんだが、持っていたパンが袋ごと落ちた。声がした方を見ると、ＯＤ色の作業服と防護メットを装着した三〇歳くらいの女が立っていた。紛れもない、運輸隊だ。

「クソッ！」

逃げようとして振り返ると、同じ装備をした、見るからに屈強そうな男が走り寄ってきた。思わず舌打ちをする。こんなやつ、さっきまでいなかったのに！

「はは、悔しそうだな。さっき別の隊から連絡があってね。ここに来てみたら大当たりよ」「しかしナギさん、よくこの道だって分かりましたね」「多少は作りを把握している場所だったし。まあ最後は勘だったけど、体力が有り余ってるクソ男子じゃなくて良かった」

私を挟んでいい気になっているのか、二人は勝ち誇ったように会話を始めた。……苛つく！

「舐めんな！」

ババアを狙う。どうせ相手は素人だ。男よりかは女相手の方が勝算が高い。相手の脇にタックルをして、そのまま横を通り抜け――。

「ぐ、がっ」

上下がひっくり返る。強い遠心力を感じて、次の瞬間には仰向けに地面へ叩きつけられていた。リュックに入っていたものが飛び出して、缶が転がっていく音がした。

「残念、こっちは素人じゃないんだ」

呆れた顔で女がこちらを見下ろしていた。

「連絡をよこしたアイツらは素人に毛が生えたレベルだけど、私は一応元自衛隊。逃げられるとか思うなよ」

ガッツは認めるけど、と女が笑う。まさしく王者の余裕といったところか。

「私はナギ。あんたは？」「答える必要ない」「いやいや、名前くらい言えるだろ」「言いたくない」「やれやれ、面倒なやつだな。そっちがその気なら……顔上げて」

女は腰に付けていた小型の端末を取り出す。内蔵されているカメラで人間を撮影すると、ＡＩが自動で国民の詳細を表示するデバイスだ。今も残留ＡＩで動作しているのだろう。おとなしく使えなくなっていればいいものを。巡査が持っているのは知っているが、運輸隊も持っ

ているとは知らなかった。

「ふーん、なるほど……」

スキャンはもう終わったらしい。女は端末に付いている小型の液晶画面に目を走らせていた。一瞬の後、女はこちらを見て、

「大体把握したけど……大変な境遇だな。さあ立って、保護施設まで送ってやる」

女が黒色の手袋をまとった手を差し出す。人工皮革製らしき手袋には細かな傷がいくつも入っており、使い込んでいることがよく分かった。最初からまともに戦って勝てる相手ではなかったのだ。

逡巡した後、目の前の憎たらしい女――ナギの差し出した手を、私はしっかりと握った。

＊

ハッとして起き上がる。寮の自室だった。窓の外はまだ薄暗い。

壁掛けの時計を見る。午前六時前。出勤の時間まであと一時間だ。

……あの夢を見たの、久しぶりだな。

かつてのことを思い出す。当時は心が荒みきっていた。どうにでもなれと思っていた。あらゆるものを憎んでいた。でも、私は、ナギさんと会って変わったのだ。

「もう、何も憎まない」

これは、あの時の私の誓い。私のアイデンティティだ。

「あーちゃん……？」

隣で寝ていたサヤが、とろりとした寝起きの目で尋ねてきた。

「夢を見てただけよ」「そっか」「うん」

そう答えると、もぞもぞとサヤがこっちに寄ってきた。

「ねえ、キスして」

サヤがこちらを見上げて唐突に求めてくる。下を向くと目と目が合った。サヤの目は不思議なもので、じっと見つめていると、時折その瞳に吸い込まれそうになる。私はかぶりを振る。今はその気分じゃない。

「えーっ、なんで」「そもそも、どうしてキスして欲しいの？」「理由なんか要らないでしょ」「そんなことないわ」「じゃあしてくれないの？」「理由を言ってみなさい。そ

れが妥当だったら考える」「好きだから」「理由にしては弱いわね」「あっそ、じゃあもういい」

サヤは不服そうに鼻を鳴らし、私から顔を背けた。彼女はそのまま起き上がってベッドから降りる。髪を梳きに行くのだろう。

「ねえ、今日はどうしようね？」「どうもこうもないわ、普通に仕事をするだけよ」「違う、私はどうしよう、って話だよ。アルバイトが無くなっちゃって暇なんだけど」

「何か勘違いしてるみたいだけど、元々サヤは私の使用人という扱いなんだから、私がいないときは家のことだけしてたらいいのよ」「だから、それが暇すぎて困ってるんだってば。手軽な副業ないかなあ。そしたら生活も楽になるじゃん」「……だったら運輸隊の事務職とかしたら？本部の事務所ならいつも忙しそうだし」「えー、あそこは死ぬまで働かされそうで嫌」「じゃ何がしたいのよ」

私がそう尋ねると、

「あーちゃんと一緒にどこかに行けるなら、一番それがいいかな」

ブラシをかけながら、サヤはそう言い切る。まるでプロポーズの台詞のようだ。

「……どうして」「え？」「どうして、そこまでして私と一緒にいたいの？」

私は再度サヤに尋ねる。サヤとは確かに一年間共同生活をしてきた。しかし、それはあくまで私の使用人という扱いで同居をしているからだ。私にそこまで尽くす義理はないはずだった。サヤは私の問いかけを聞くとクスクスと笑って、

「あーちゃんは本当に質問が多いよね」

とだけ返した。そして私が玄関を出ても、とうとう答えてくれることはなかった。

破

それから何事もなく数日が経った。

「よし、到着。物資を降ろすぞ」

私たちと物資を載せた運輸用車両が食料品店の横の通りに停まる。本来なら駐車場に入れるべきだが、ＡＩが消えてからほとんどの一般車両が機能しないために車道

はガラガラで、駐車場が小さい場合は車両の出し入れが面倒という理由もあって、通りへ停める場合が多かった。駐禁を取られたことは一度もないし、今後もないだろう。

ドアを開けるやいなや、強い冷気が迫ってくる。天気予報によると、今日は日中でも氷点下で、これが二日間に渡って続くらしい。電撃銃を持って外へ出ると、風がある分余計に寒く感じられた。鈍色の空からは今にも雪が降りだしそうだ。

車両の音を聞きつけてか、横にある食料品店から運搬用の電動台車が数台と、鼠色の服を着た店員が数人現れた。

「予定通り、タクとジュンは運搬。ヒロは運転席で待機。本部から連絡が来たら逐一知らせて。私とアヤは見張り。アヤが前方で私は後方。いいね？」「了解」

ナギさんが指示を出す。タク、ジュン、ナギさんは車両の後方に回り、私は車両の前方に立った。作業完了は一〇分後の予定だ。私は周囲を警戒する。とはいえ、着任してから襲撃されたことは一度もなかった。この食料品店はさほど大きくない。通りも一車線、人もまばらだ。ましてや、こんな寒い日に好んで出かける人は少ない。私はたまに見える人影を追いつつ、ぼんやりと考え事をする。

一般人が電撃銃を奪ったという話が出て以降、新名古屋の方では機動隊が動員されたらしい。しかし、隣にある私たちの街は対象外だった。また、昨日のテレビニュースによると、日本は海外からの攻撃に備え、防衛力を強化しているとのことだ。番組では戦闘機や軍用設備の名前とありがたい言葉が紹介された。自衛隊は防衛のために、機動隊は残された巨大都市を統制するために忙しいという。番組の最後には張り付いた笑顔の自衛官が映し出されていた。

『こちらナギ。アヤ、異状は』

腰に付けている汎用無線通信端末から声がする。

「こちらアヤ、問題ありません」『よし。こちらも問題なし。タクとジュンも順調そう。搬入が終わり次第連絡するから』「了解」

ああ、この調子なら、すぐに車両へ戻れるだろう。風が吹いて身震いする。手袋のおかげで手は温かったが、作業服が防寒仕様でないために体は冷えた。装備が整っていればと思ったが、様々なものが不足している現状では

望み薄だ。

『あー、アヤ、寒くないか？』

再び無線が入る。ナギの声ではない。

「こちらアヤ。ヒロ、何かあった？」『いや、ちょっと聞いただけだ』

振り返ると、運転席で手を振る長髪の男の姿が見えた。私は再び前を向くと、ため息混じりに答える。

「逆に訊くけど、寒くないと思う？」『いや、そうは思わんね』「なら仕事に戻って。ナギさんに怒られるわよ」『本部から連絡もないし、この無線は一対一（ユニキャスト）だからバレやしないよ』「私がチクったらどうするの」『お前はそういう奴じゃないだろ』

ヒロが楽しげに笑った。彼は悪い人間ではないのだが、勤務態度が真面目とは言えない節がある。……が、私も暇だったので、ついつい無駄話を続けてしまう。

『なあ、暇だろ？　こっそり助手席に来ないか？』「セクハラね。報告しようかしら」『冗談だよ。お前にはお相手がいるって誰でも知ってるさ』「お相手って、サヤのこと？　まるで私とサヤが付き合ってるみたいじゃない」『はあ？』

今までの会話の雰囲気とは反対に、しんとした静寂が過ぎる。

『……まさかお前、まだ認めてないのか？』「ええ、サヤは私の恋人じゃないわよ」

ザザザ、とスピーカーに大きなノイズが走る。それがヒロの大きなため息であると気づくのに数秒を要した。

『一昨日、寮でサヤと会って話したよ。お前、サヤに随分と酷いことを言ったらしいじゃねえか』「彼女のアルバイトに怒った話？」『ちげーよ、サヤがせがんだキスをお前が断った話だ』「なっ――」

その話は全くの予想外だった。あの日は拒んだが、いつもは異なる……なんて弁解しようと一瞬思ったが、さらに誤解を生みそうなのでやめておく。サヤに灸を据えておかなければ。

『酷い話さ。好きだ好きだって求愛されて、同居までしてるのにこれかよ？』「サヤは去年、私が雇った使用人なの。だから同居していても恋人じゃないわ、仲はいいけど。雇ったのはあなたが入る二、三ヶ月前のことよ」

『なるほどねえ、まあ詳しくは聞かんが』

彼なりに、プライベートの深い部分まで踏み込まないだけの配慮はあるようだ。

『雇ったって話で思い出したが、お前は普通の雇われじゃないらしいな』「ええ、ナギさんに別口で隊に入れてもらったの。この恩は返さなきゃならない。だから、そもそも恋愛なんかしてる場合じゃないのよ」『結局そうなるのかよ』

やれやれ、とばかりにヒロが嘆息した。

『恋愛禁止とか言われたことあるのか？』「ナギさんはそんなこと言わないわ」『だったら別にいいだろ』「……あくまで私の問題」『なら、恩を返し終えたらどうするんだ？』「無期限だから考えるだけ無駄よ」『仮に、の話さ』

そこまで言われて、少しだけ考えてみる。もし、恩返しが終わりを迎えたら、私は――

――また、かつての私に戻ってしまうのだろうか。

「嫌」『は？』「絶対に、それは嫌」

嫌、という言葉が咄嗟に出てしまった。全く答えになっていない。無線の向こう側で、ヒロが対応に困っているのが分かる。返答を若干後悔していると、ヒロがゆっくりと話し始める。

『なあ』「何よ」『さっきの話なんだが、いいか、あくまで仮にだぞ、お前が恩返しから解放されたら』「ええ」

『その時は――』

そこまで聞こえたところで、スピーカーからもう一人の声が流れる。

『こちらナギ。作業完了を確認。……ヒロ、誰と話してたんだ？』『え、いや』『話してるのが見えたぞ。今の受け答えからして相手は本部じゃないだろ。アヤか？』「こちらアヤ。ええ、そうです」

私は答える。

「暇だ、とヒロが連絡してきて、会話に付き合わされました」『てめ……』『ヒロ？　随分と呑気なことだな』

『すみません、隊長、でも本部からは何も――』『言い訳無用！　ヒロ、運転をジュンと交代しろ。今日の残りは外に出て荷物を運んでこい』『げえっ、今日は楽だと思ったのに……』

ヒロの嘆く声が聞こえた。まあ、職務怠慢の結果ではある。……私も人のことは言えないが。

『アヤも構うな。次はないぞ』「了解」『よし。全員車両に

戻れ』

＊

再び動き出した車両の中に、暖かな風が吹き渡る。AIがエアコンを人類から奪っていかなかったのは不幸中の幸いと言うべきか。

「んー、身に染みるねえ」「隊長、独占しないでください。寒いっすよ」

隣に座っているナギさんが上部にある送風口に手をかざすと、ナギさんを挟んで私と反対側にいるヒロが不平を述べた。

「仕事が半人前のくせに文句だけは一人前だな」「じゃあ言い方を変えます。俺はいいっすけど、外にいたアヤは寒いはずですよ」「はは、相変わらず口が達者なことで」

「恐縮です」

そう笑うと、ナギさんは手を引っ込めた。

「やれやれ。アヤもどうよ？　手を当ててみな、暖まるぞ」「私は手袋をしていたので平気です。というか、ナギさんも黒色の手袋を付けてますよね？」「勿論付けてるけど、最近穴が開いて寒いんだよな」

ナギさんが脱いだ手袋を差し出す。手に取って見ると、右手側に裂けたような穴が確かに開いていた。

「替えの手袋を用意しましょうか？」「いや、あるにはあるんだ。ただ、長いこと使ってきただけにこっちの方が手に馴染んでね」「そんなに長いことですか」「うーん、運輸隊に入る前からだから……ざっと一〇年は使ってるか」

思い返すと、ナギさんが私と初めて会った時も同じ手袋をしていた気がする。

「まあ、私みたいな老いぼれにはこのくらいの手袋がお似合いってね」「そんなこと言わないでください、まだお若いですよ」「そう言われるのは嬉しいけど、実際、三〇代ももう折り返しよ」「それは……」「いつまでこの職が勤まるかも分からんしねえ。あーあ、数年前に適当な男引っかけて結婚しときゃよかったかな」

とはいえ男にはあんまり興味ないんだけど、とナギさんは小さく嘆息する。それを聞いて私は、

「ナギさん」「うん？」「私で良ければ――」

その続きを言おうとしたところで、ナギさんの手が私

の口を覆った。

「それは冗談でも言っちゃいけないことだよ、アヤ」

右手を戻しつつ、呆れた表情でナギさんが言う。ヒロはその隣で頭を抱えていた。

「アヤ、あんたは私との契約でここにいる。関係はそれ以上でもそれ以下でもない」「……」

私は、ナギさんに大きな恩義を感じていた。ナギさんが望むのであれば、私は喜んで寝食を共にしただろう。だが、それはあえなく拒否され、儚く散った。あっけないものだ。ナギさんにとって、私は私でしかなかった。そういうことだろうか。

「もう少し周りに気を遣いな。特に使用人さんに対してはね」「……サヤとは、そういう関係じゃ」「だったらちゃんとそう伝えて別れなよ。そっちに筋を通すのが先だろ」

ここまで話すと、ナギさんは顔を緩めて、

「それに、私みたいな年増はアヤに似合わないって」

と呟いた。そう言われると、もう私に返す言葉はない。箪笥の角に足にぶつけたときのような、じんとした感覚が自分の心に広がった。

窓の外で、どんよりとした雲と汚れたビルが流れていく。見飽きた、随分とつまらない光景だ。そこから幾許かの間は誰も話そうとせず、エンジンとエアコンの単調な動作音だけが聞こえる無機質な時間が続いた。

だが、唐突に、黙っていたジュンが運転席で声を発した。

「うわー、これは大変そうだな」「どうした？」「ほら、あれ」

ジュンが前を指さす。後方に座っていた私たちが身を乗り出すと、車道に散らばった食料らしき物資と、転倒した老人、それを助けている若い男の姿が見えた。転んだ老人の介抱だろう。車道は一車線の狭めの道で、彼らが片付くまで通ることは難しそうだ。車両はゆっくりと減速し、車道にいる二人の手前数メートルで完全に停まった。

「おいおい、爺さんたちしっかりしてくれよ」「ナギさん、どうします？　迂回しますか？」

助手席に座っていたタクが嘆き、ジュンがナギさんに問いかける。

「いや、このくらいなら片付くまで待つか。時間にはまだ余裕があるし」

私は車内の時計を確認する。次の場所の到着予定時刻

まで一〇分以上残っていた。後はこの道を抜けて少し行けばその場所だ。余裕は十分にある。

「しょうがないっすね、俺が手伝ってきますよ」

そう言って、ヒロがドアを開けて出ていく。咄嗟に動けるのは見習うべき点だろう。

「ところで、あの爺さんたちってどっかで会ったことなかったか？」

ナギさんが首を傾げて尋ねる。

「どうでしょう、いろんな人間と会ってますから、俺は何とも言えません」

タクとジュンも決定的な心当たりはないようだ。

「アヤはどう？」「特に心当たりはありません」「そうか。でもなーんか引っかかるんだよな、怪しいというか……」

そこまで言ってから、ナギさんはハッと何かに気付いた表情になって、弾かれたように叫ぶ。

「ああ、クソッ、思い出した！　ヒロ、今すぐ戻――」

その時だった。

＊

缶を力強く蹴ったような音がして、老人の近くに寄っていたヒロが大きく痙攣した後、その場に倒れた。一方で、散らばった荷物を集めていた、いや、集めるフリをしていた若い男と、転んでいるフリをしていた老人が立ち上がる。二人の手には、私たちに配給されるものと同じ電撃銃が握られていた。恐らく、新名古屋の隊から銃を奪った奴らだ。音の正体は発砲音だろう。

同時に、近くのビルの間から三人の男が走り寄ってきて、道路にいた二人の前に躍り出た。集まった男五人の服装はみな貧相を極め、泥で汚れたジーンズや色あせたり破れたコートを着ている。顔を隠しているのは家庭用の白いマスクのようだ。

そして、驚くことに、全員が電撃銃を握っていた。

「……ジュン、本部に連絡」「非常警報（エマージェンシー）を出しました。応援が来るはずです」「ドアのロックは」「しました」「よし」

車内はエンジン音だけになった。空気が一気に張り詰める。ナギさんは眉間に深い皺を寄せながら、ヒロの倒れた場所を凝視している。ヒロは白髪の老人に銃を突きつけられていた。起き上がる様子も見られない。

「……複製（コピー）されたか」

ナギさんが呟く。声のトーンが一段と下がっていた。

「盗まれたのは二丁だけだったはず。それが五丁になって、他から強奪されたという報告もない。複製（コピー）された可能性が高い」「しかし、一体どこで……」「新名古屋なら生きてる設備が残ってたのかもね。最初からそれが狙いで襲ったのかもしれない」

電撃弾はともかく、銃については単純な構造だ。生きている設備があれば、複製（コピー）できなくもないだろう。

「クソッ」

怒りからかタクがダッシュボードを殴るも、ただ虚しい音が響く。ジュンは通話用のヘッドセットに手を当て、青白い顔をしながらも本部と会話をしていた。

「おい、降りてこい！」

短髪の男が車両の近くに寄ってきて叫び始めた。手にした銃はこちらの窓に向けられている。

「いいか、俺たちの銃は改造してある！　非致死性（ノンリーサル）じゃない！　一発じゃ死なないだろうが、次撃ち込んだらこいつは死ぬぞ！」

そう言って男が手を上げると、老人がヒロの背中にぐいと銃口を押し込んだ。それを見てタクが叫ぶ。

「まさか！　そんなことできるわけない、改造なんて素人には無理だ！」「断定はできない」「なんでですか、こんなのありえ――」「落ち着け！」

ナギさんの一喝でタクが黙る。鬼気迫るナギさんの表情にはそれだけの力があった。彼は額に拳を当てると、その場で深呼吸を始める。鼻息はまだ荒いが、じきにパニックも収まるだろう。

……問題は、ヒロだ。万が一、男の話が本当だとすれば。

「ナギさん、どうしますか」「……」

数分前まで同じ車内で笑っていた人間が、冷たい地面に突っ伏して銃口を向けられている。フロントガラスの向こう側を睨んだまま、ナギさんは返事をしない。そうして、体感で数十秒が過ぎた頃だろうか。

「ジュン、本部から返事は」「応援は一〇分後に到着見込みとのこと」「分かった」

ナギさんは目を閉じ、一度大きく息を吸ってから告げる。

「タク、アヤ、覚悟はいい？」「はい」

ナギさんは私たちの返事に頷くと、ジュンにロックを外すことと、万が一全滅の際は車両ごと離脱するように指示する。ジュンも大きく首肯した。

「よし。三人で同時に左側から出るからな。カウント、三、二、一」

今、という言葉と同時に、ナギさんが左側のドアを開けてすばやく地面に降りる。私も続いて外に飛び出した。掴んでいる電撃銃がいつもよりも重く感じる。前のドアからタクも飛び出し、そのままドアを力強く閉めた。私もドアを押し込んで締める。同時に、ガシャン、と背後でロックの音がした。もう退っ引きならない。

ビルから飛び出してきた小汚い三人が、素早く私たちの前に移動してくる。こちらが彼らに照準を合わせると、彼らもこちらに向けて銃を構えた。一方で後方の二人はヒロの方に集中していて、こちらに構う気配はなかった。

「要求を言え」

素早く先頭に立ったナギさんが鋭い声で尋ねる。

「単純だ、食料を渡してくれ」

先頭の男が答えた。ボサボサの縮れ毛で、右肩部分に穴の空いたデニムのジャケットと、くるぶしが見えるほどに丈があっていないチノパンを着ている。その境遇は察するに余りある。

「これは人々に届ける物資だ。明け渡すわけにはいかない」「お、俺たちの物資だって届いてないんだぞ！」

三人の中で一番後ろの、メガネをかけた小柄な男が甲高い声で叫んだ。

「俺たちだって好きでこんなことをしてない！　もうずっと物資が足りてないんだ、ちょっと分けてくれたっていいだろ？」「……できない」「じゃあ、俺たちに死ねって言うのかよ！」「おい、待て！」

小柄な男がこちらを睨んで走り出そうとするのを、先頭の男が腕で制止する。そして、なあ、と彼は語り始めた。

「お前たちは、今の新名古屋の現状を知ってるか？」

「いや」「酷いもんさ。上のやつらが何かと理由をつけて物資を持っていくせいで、一般人には予定の半分くらいしか回ってこない。物資の生産側の生活も苦しくなって、闇市への横流し量が増えてる。負の循環だ」「……」

「だが、俺たちはそいつらを責める気になれん。皆にも家

族がいて必死なんだろ。そんなことは分かってる。だけどな、俺たちにも家族があって生活がかかってるんだよ」

男が銃を握り直す。

「だから、俺たち自身が動くしかないんだよな」「それが本当だったとして、この街を狙う理由にはならないが」

「新名古屋は俺たちが電撃銃を借りたせいで大騒ぎで、今ドンパチしたら確実に犬死にだ。それにいいか、俺らはあんたらともやりあう気はない。ほとぼりが冷めるまで生きられる分の物資さえ分けてくれればいい。それ以上迷惑はかけん」

男は銃を持ったまま、左手で背後を示して言う。

「そうすれば、誰も傷つかずに済むぞ」「このクソ野郎――」

「タク、動くな！」

相手の挑発に乗りかけたタクをナギさんが制する。一触即発。どちらかが動けば、もう止まらないだろう。ナギさんも向こうの男もそれを分かっている。

「要求はそれだけか？」「ああ、約束する」「少し、考える時間を――」「そう言って応援を待つんだろ。生憎すぐには来られんよ。あと三〇秒以内に決断しないなら、あいつは二度と帰らんと思え」

男は冷徹かつ冷静だった。まるでこちらの手の内を読んだ上で、周到に準備を進めてきたかのように。

「俺たちの要求は食料だけだ。この街は配給がスムーズで、物資が多少減ったくらいじゃ死人は出ない。一方でこっちは飢えて死にかけてる。んで、これ以上の迷惑はあんたらにかけない」「……」「今、決めてくれ」

ナギさんは動じることなく、静かに立っていた。背後から表情を伺うことはできなかったが、きっとそこには一切の焦りも見られないだろう。

「……A2標準食糧一式、二箱。節約すれば、二〇人規模でも二週間は持つ」「三箱だ」「この条件を飲まないならトラックを下げる」「その意味は分かってるか？」「これ以上一般人を苦しめられない。こっちにはその責任がある」

「……あんたがうちの市にいてくれたらな」

はあ、と男は嘆息して、

「よし、それでいい。A2を二箱用意しろ、後ろで伸びてるやつと引き換えだ」

何とか交渉がまとまったようだ。

「タク、頼む」「ですが」「頼む」「……分かりました」
落胆した声を返して、タクが後ずさりしながらトラックの後ろへと戻っていく。それと同時に、大きなモーター音を響かせながら、小型の荷物運搬車が男たちの背後からやってきた。無人の四輪車で、遠隔操作されているらしい。緑色の塗装は色あせて、荷物を載せる台は錆びついていた。
「そいつに二箱載せろ、お仲間さんはそれと交換だ」
男が銃の先を運搬車に向けて指示する。背後から露骨にタクの舌打ちの音が聞こえた。
ほどなくして、茶色の大型のダンボールを二箱積んだ車両が男たちの方へと戻っていき、その隣で停まる。三人の真ん中からパーマの男が前に出てきて、ダンボール箱の中身を確認する仕草をする。彼は二箱とも開封してから、先頭の男に対して耳打ちをした。
「よし、取引成立だ」
先頭の男が片手で合図すると、老人と若い男がヒロを引きずってきた。ナギさんが少しだけ前に進む。
「こいつはここに置いていく。このままお互いに背後に下がって――」
それは、唐突に起こった。目の端にチカチカとした光を感じた瞬間、連続した発砲音がして、ナギさんが足をもつれさせながら後ろに倒れ込む。両手を広げたまま複数回痙攣した後、ナギさんは動かなくなった。
数秒の間、何が起こったのか理解できなかった。それはきっと私たちだけではなく、向こうの男たちもそうだったのだろう。唖然とした顔でナギさんを見下ろしている。そして、甲高い声をした小柄な男も、電撃銃のトリガーを引いた状態のまま目を見開いて硬直していた。
そこで私は、ようやく事態を認識した。
ナギさんは撃たれたのだ。それもきっと、不慣れな人間による誤射に巻き込まれて、何発も被弾したのだ。

＊

あいつが、ナギさんを撃った。あいつが、私の恩人を撃った。
当の犯人は、相変わらずぽかんと立ちすくんでいる。
私は、数年ぶりに、心の底からドス黒い感情が湧き上

がるのを感じた。負の感情。名前なんてどうだっていい。ただそこにあったのは、
――許さない。
感情の激流が全てを飲み込む。視界を。思考を。意思を。
腕が勝手に動く。訓練通りに銃のセーフティーを解除し、犯人に向けて発砲。胸部に命中。相手は悲鳴を上げながら倒れた。周りの男らも慌てて銃を構え直すが、遅い。先頭の男を狙って発砲。命中。そのまま背後のパーマにも発砲。命中。ヒロの横にいた若い男がこちらに発砲したが、弾は脇にそれた。間髪入れず、そちらに向けて発砲。哀れにも頭部に命中した。逃げ出そうと背を向けた老人の背後に走り寄り、発砲。情けない声を上げて最後の一人も倒れた。
オールクリア。敵戦力を無力化。素人の虚を突いた攻撃が功を奏し、あっけないほど簡単に鎮圧が終わった。ここで、以前の訓練を思い出す。数ヶ月前、新名古屋から来た教官は言っていた。万が一敵が現れた場合、素早く鎮圧する。成功したら、その後はやってきた警官に引き渡す。君たちの役目は争いではない、だからそれ以上は何もするな、と。だが、私はこの訓練で習いそびれたことがある。自分の恩人が撃たれて倒れた時、敵をどう処理すべきかということだ。
習ってないなら、どう動いてもいい。
近くに落ちている改造銃を道路脇に蹴飛ばしながら、犯人のそばに向かう。相手はうつ伏せになったままその場で震えていて、銃を未だに自分の体の下に残していた。引っ張り出そうとして顔を近づけると、小さく何かを呟いているのが聞こえた。耳を澄ましてみる。相手は弱々しい声で、嘘だ、嘘だという言葉を繰り返しているようだった。
そこで、私は我慢できなくなった。
「ふざけるなあああぁぁぁぁぁ！」
再度発砲。高速で射出された電極が相手の体に突き刺さり、電流が放出される。相手は悲鳴すら上げられなかったのか、ただその場でのたうち回っていた。はずみで抱えていた銃が飛び出てくる。そこで、ふと、私は思いつく。
――そうか。きっと、正解はこれだ。
私は、今まで懸命に握っていた生ぬるい非致死性（ノンリーサル）の玩具を放り投げた。代わりに、足元にある致死性（リーサル）の得物を

手に取り、しっかりと握る。正規品と見た目は同じでも、こちらの方が倍ほどずっしりとした重みがあるように感じられた。改造銃とはいえ元は同じ型で、操作はお手の物だ。思わず下衆な笑みが零れた。いける。

相手が転がって仰向けになると、泣いているのか、細かな砂が顔に貼り付いているのが見えた。いつの間にかメガネはなくなっていた。その顔に銃口を向ける。まだ二発しか撃ってない。ナギさんは数発撃ち込まれた。同じだけの苦しみを与えなければ不公平だ。こいつには何発必要だろうか。

遠くにサイレンの音が聞こえて、背後からは何やら叫ぶ声がした。うるさい、今はそれどころじゃない。

さあ、躊躇は要らない。

私は、引き金に手をかけて――。

――二〇〇年一月一七日　午前一〇時二〇分――

目の前にいる憎たらしい女――ナギの差し出した手を、私はしっかりと握った。そして、そのまま体を起こした勢いで、相手の腹にもう片方の手を思い切り突き出した。

「しまっ――」

瞬間、女が驚きと苦悶の入り混じった表情をする。

気に入らない。気に入らなかった。女が私を見る目が気に入らなかった。私は、あの目を知っている。同情の目だ。かわいそうな子、捨てられた子と憐れむ目だ。

それは、相手を自分よりも格下の人間だと見下す目でもあった。

――死ね。

もはや自分の意思ではなかった。まるでもう一つの人格があるかのように、一瞬の感情が自分の理性を突き抜けて体を動かした。

まともに戦ったら、私は女に傷一つ付けられなかっただろう。しかし、女が油断していた一瞬の隙に動くことができた。いや、動いてしまったのだ。

気が付くと、地面に落ちていたはずの果物ナイフが、女の腹に突き立てられていた。まるで濃いぶどうジュースのような、赤よりも黒に近い色の液体がOD色の服を貫通して、刺さった部位からじんわりと染み出してくる。ナ

イフの柄をつたって、赤黒い大きな水滴がいくつも地面へと落ちていった。

そこで私は理性を取り戻したが、あまりに遅すぎた。目の前の光景を私の理性は受け入れられなかった。

「このクソガキがあぁぁぁ！」

背後の男に思い切り頭を殴られて蹴り飛ばされる。女から二メートルほど吹き飛ばされたが、立ち上がることができなかった。脱力して力が入らないのだ。

数年前、衝動的に人を殺してしまったと泣きながら後悔する男をニュースで見たことがある。当時、私はそういう人間を、前頭葉が十分に成長していない野蛮な動物だと嗤っていた。だが、今になって、ようやく彼の行いの意味を理解した。追い詰められた人間は、もはや誰しも動物になり得るのだと。

怒りを顔中に滲ませた男が、肩を震わせながらこちらへ向かってくる。彼もまた、私と同じなのだ。感情が体を動かしているのだ。きっと、私は殺される。

「やめろ！」

女の鋭い声が響いた。ナイフで刺されたとは思えないほど、力強い声だった。男が、私につかみかかる寸前で動きを止める。彼は迷っているのか、全身が動くほどに荒々しく呼吸を数回繰り返すと、私の前から引き下がっていった。

「……おい、田村彩音」「その名前で呼ばないで」

久々に呼ばれた本名、田村という名前の響きに吐き気がこみ上げた。顔を動かして、女を睨む。

「はは、悪い、やっぱりそうか」

女は、怒るどころか、どこか楽しそうにしていた。面白いものを見つけたとでも言わんばかりの緊張感のない顔で、私の方を見つめてくる。

「記録を見たよ。あんたの両親、政府とも繋がりが深いAI研究者だったんだな。それがAIの事件の後、ぱったり行方不明になった。世界の混乱もあって、あんたのことは誰も助けてくれなかった」

そこまで話したところで、女は腹を抑えて唸る。黒い染みが広がっていた。常人なら話すことすら難しいだろう。しかし、それでも女は話を続けた。

「結局、両親の失踪を理由に住んでる場所を追い出され、

入れられた保護施設から脱走、だったかな。そこで何があった？」「……施設の運営難で私が裏ルートに売られそうになった」「やれやれ、エグい話だね」

女は嘆息した。

「その後一年間、誰からも支援を受けずに生きてきたのは決して楽じゃなかっただろ。混乱の原因のＡＩと社会、自分を見捨てた親を恨むのも無理ない」「……」「さっきは私の態度が気に障ったんだよな？　そこについては謝っとく。悪かった」

そう言って、女が頭だけを下げる。それが女の精一杯のようだった。

「正直な話、今の今まで、私はあんたをさっさとムショへ放り込もうと思ってた。保護施設には空きがないし、態度は生意気だし、面倒なやつは要らないってね」「……そうじゃなきゃ、あんな目はしないでしょ」「ああ、悪かった。だけど、気が変わったよ。この私を刺したんだぞ？　ガキの割に骨がある。運輸隊に待遇目当てでノコノコやってきた連中より、よっぽど役に立ちそうだ」「ちょっと待ってください、ナギさん！」

屈強な男が、私を睨みつけながら異議を唱える。

「まさかこんなクソガキをうちの隊に入れる気ですか！？　こんなやつ入れたところで――」「あー、もう、うるさい！」

叫んだ反動で痛みが走ったのか、ぐっ、と女が声を上げる。

「私はこいつに可能性を感じたんだ。境遇もある、一概にクソで済ませるには惜しい」「しかし、こいつは」

「ケン、懸念は分かるけど、一回くらいチャンスをやるのはいいだろ。駄目だったらムショに戻すさ」「……」

それ以降、男は何も言わなくなった。ただし、力強く睨む目は私に向けられたままだ。しばらくの後、女は続ける。

「まあ、だからさ。今回は私にも非があったことだし、チャンスをあげようと思ってる。今から言う条件を飲めば、あんたにうちの隊での職と――新しい呼び名を渡す。衣食住も保証する。で、私は今回のことを許す」「飲まなかったら？」「獄中で死ぬかどっかに飛ばされるかだと思うけど。いずれにせよ、環境は悪いんじゃないの」

新しい職、新しい生活。路上で生活する必要がなくな

る。運輸隊の隊員なら、それなりの待遇があるのだろう。そして、新しい呼び名。忌々しい親が付けた名を捨てられる。それはとても魅力的だ。

「あんたは知らないだろうけど、数か月前、政府は罪人に『社会奉仕活動』をさせることを認めた。ＡＩ体制崩壊でどこも人手不足だし、治安悪化で刑務所もパンクしそうだったからね。もしあんたが条件を飲むなら、被害者である私が、うちの隊であんたを奉仕させるよう訴える。最近の流れからして、十中八九通るはず」「……」

私は唾をのみ込んで、その続きを待った。

「いい？　私の条件は――」

痛みに顔をしかめながらも、女は続ける。

「これ以上、もう憎まない。怒らない。悲しまない。これが条件」「……それはどういう意味？」「そのままの意味だよ。あんたは親も生活も失って、憎しみ、怒り、悲しみを常に誰かにぶつけて生きてきたんだろ？　私の隊でそれを続けられちゃ困るわけ。だからそれを捨てて働いて欲しい。その分、こっちが生活を保障する」

なるほど、字面だけなら単純明快な条件だ。得られるメリットも申し分ない。憎しみ、怒り、悲しみを捨てるということを真剣に考える。

確かに、私は、ＡＩを憎んでいる。あいつが、私の生活を狂わせた。あいつが、私の親を消した。そんなことを許した人類も許せなかった。両親すらもそうだ。でも、憎むことで問題は解決したか。怒り、悲しみは必要だったか。

全てのものをポジティブか、あるいはフラットな目線で受け取ることができたなら。二度と不快な感情を抱かなくて済むのなら、悩み苦しむことは二度とないだろう。仮にそれを実現できたら、それは私にとって願ってもないことなのではないか。かつての私には、確かに平穏に包まれた日々と希望に溢れた未来があった。しかし、それはもう失われてしまったのだ。既にないものに思いを馳せることは、無駄でしかないのではないか。そして、未来を負の感情で汚すことは必要だろうか。非生産的な感情は存在からして根本的に不要なのではないか。この女は、私から感情を奪おうとしている。それは、果たして悪だろうか。

「さあ、どう？」

ドクン、と心臓が脈打つのが聞こえた。指先まで神経が昂るのを感じる。心に生まれた強いうねりが体にまでその影響を与えていた。今までの人生では、こんな条件は実現できなかった。考えたところで、最後には自分の精神、怠惰な部分に負けたはずだ。自分自身で自分自身を律するには限界がある。それができると思えるほど、私は愚かでも豪胆でもない。だが、今、私の人生は転換期を迎えていた。目の前の女に人生を握られている。残された選択肢はたった二つ。

彼女の下では、私は自分を殺される。殺さざるを得ない。一方で、かつての自分を取り戻せるのではないか。あるいは、かつての自分以上になれるのではないか。

私の口は、脳が答えを出す前に動き始めていた。

「分かりました」

答えてすぐ、随分と清々しい気持ちになった自分に驚く。つっかえたものが取れたような、棘だらけの茨を全て引っこ抜いたような、汚物をようやく捨てることができたような、そんな感覚があった。支配を受け入れるということは、こんなに素晴らしいことなのか。これが、解放。失ったはずの平穏と未来を取り戻すということ。

――これで私は、変わることができる。

「契約成立、と」

女がぎこちない笑顔で笑みを浮かべる。痛みがある中、精一杯の力で笑っているのだろう。女は告げる。

「さて、新しい名前だけど……あー、アヤ、アヤがいい。うちの隊では名字はなし。今日からお前は、アヤだ」

アヤ。それが、私の新しい名前。

遠くから聞こえるサイレンの音が徐々に大きくなってきた。救急隊が来るのだろう。いつの間にか、私の後ろで男が誰かと話している。さらに、複数の足音がこちらに駆け寄ってくるのが分かった。

「一旦あんたは逮捕されるけど、社会奉仕活動として私の隊に入れるよう上に掛け合う。殺人未遂だから期間はほぼ無期限。私が良いと言うまで働いてもらうから、よろしく」

そう言って、眼前の女、上司ナギは私の後ろに目配せをすると、小さく首肯した。野太い男の声が私を呼ぶ。

「そこのガキ。お前を殺人未遂の現行犯で逮捕する。い

いな？」「……はい」

背後から伸びてきた腕が私の両手を掴む。一瞬の後、鈍く曇った銀色の手錠は田村彩音としての私を完全に縛った。そして、この時の私の表情はきっと――ほっと安心したような、満足げな笑顔だったのだと思う。

＊

中部運輸隊第二五小隊の本部は三階建てで、学校の体育館を一回り大きくしたくらいの建物だ。もともと小規模な物流倉庫として使われていた場所のため、一階には荷物と運輸車両の倉庫、二階には事務所、三階には会議室と空き部屋があった。用途からして、運輸隊にこれほど似合う場所はないだろう。ただ、築四〇年近くの古さに加えて、あちこち汚れてきているのが難点だった。例えば、この部屋――三階の空き部屋の一室はその典型例だ。

カーテンの隙間から差し込む朝日が暗い空間を放射線状に照らし、六畳の部屋中に浮かぶ埃たちを明るみに出している。灰色にくすんだ壁には、絵の具を適当に撒いたようなよく分からない絵が飾ってあった。空調は時折咳をするようにガタガタと音を鳴らして、若干のカビ臭さを含む生暖かい空気を送り出している。私は使い古された布地のソファーに腰掛け、来る時に与えられた厚めの毛布にくるまりながら、ここに来て二度目の朝を迎えていた。

私は目ヤニを指で擦り落としてから、毛布を巻いたまま立ち上がり、窓際に行ってカーテンを閉める。部屋は再び暗がりになって、埃はたちまち闇の中へ消えていった。部屋に電灯がないわけじゃない。部屋の蛍光灯は切れているのか点灯しないし、そんなレトロな電灯に予備があるわけもないが、代わりにLEDの卓上電灯がソファーの前の机に置いてある。ただ、ここに来てから一度も使っていない。単純に、暗いところの方が落ち着くのだ。明るい場所では私の醜態が晒されるような心持ちがして、昼間はカーテンを締め切って過ごしていた。したがって自分から部屋に入れる光は、目覚まし代わりにしている朝日くらいだ。

ソファーに戻ってしばらくすると、唐突に部屋の戸が叩かれて、こちらの返事も待たずに男が入ってきた。逆

光になって相手の顔がよく見えない。
「アヤ、待たせたな。こちらの対応が決まった。釈放だ、会議室に来い」
この声はケンだろう。彼はかつてナギさんと一緒に私を捕らえるためにやってきた体格の良い男だ。
「……私は別に待ってないわ」「いい加減にしろ。お前は運輸隊の人間だぞ、自覚を持て」「無理よ」「お前は三年前から何も変わってないな。いつまで悲劇のヒロインでいるつもりだ？」「そんな言い方――」「まともに食事も摂らず、部屋を締め切ってジメジメと暮らす人間にはお似合いの言葉だろうが」
彼は古臭くて頑固で、配慮という言葉をあまり知らない人間だ。こういった心境の時に一番会いたくない相手だった。クソ野郎、と心の中で罵る。口に出したら謝罪するまで延々と粘着されて面倒だろう。それくらいのことは私も心得ていた。
「襲撃のことは……俺だって今でも腹に据えかねている。とはいえ、仕事は仕事だ。お前がぐずって隊に悪影響が出れば、ここら一帯の住民にも影響が及ぶんだぞ」「……」
「まあ、詳しくは後で話すが、今回のお前の処遇についてはかなり良い結果になった。お前は何も心配しなくていい。分かったらさっさと出ろ。他の人間が待ってる」

＊

「忙しい中わざわざ呼んですまない。だが、今の我々の状況は複雑で説明が必要だろう。よって、臨時の全体会議を始める」
長机三つと椅子、スクリーンしかない狭い会議室にケンの声だけが響く。集められた隊員一〇名ほどのうち、小声であっても話す者は誰もいなかった。それはケンを前にして口を開けばグチグチと言われるからなのか、それとも――
「まず、ここにいるアヤのことについて話そう」
私は、ケンの隣に立たされていた。私たちの前には隊員たちが座っている。口を開く者こそいなかったが、彼らの目は雄弁にものを語っていた。
「約二日間、この階の空き部屋でアヤを拘留していたこと、その理由が先の襲撃事件の真相究明にあったことは

皆知っていると思う。この件について、各種調査の結果と司令部との協議が終わったため、周知する」
皆に言葉が行き渡るのを待って、ケンは続ける。
「本人の証言と警察による調査の結果、アヤは無実であることが判明した。アヤは、襲撃者に対して非致死性（ノンリーサル）の武器でしか発砲していなかった」「……」
そう、私は撃てなかった。撃とうとしたとき、脳裏にナギさんとの契約がよぎったのだ。誰も憎むな、と彼女は言っていた。私も誓ったはずだった。なのに、誓った先の人間が撃たれて破ってしまったのだ。同時に、私には相手を撃つことができないのだという自覚が私を苛んだ。自己嫌悪と無力感で改造銃を取り落としたところで、後ろから走ってきたタクに確保されたのが事の結末だった。
思い出したくない記憶に触れて、唇を強く噛む。グロテスクな自分の内面を直視せずに済む方法は、もはや身体的苦痛にしか残されていなかった。
「ただし、本人の証言通り、襲撃犯が使用していた改造銃を使用しようとしていたことも同時に証明された。これについては問題にせざるを得ない。だが、最終的にアヤは改造銃を発砲しなかった。これが調査に役立った。襲撃犯らは軒並み口が硬かったらしいが、唯一アヤが撃とうとしていた相手だけが証言をしたそうだ。それによると、襲撃には新名古屋の運輸隊事務員が関与しており、さらに、何らかの工作員が絡んでいる可能性も高いと分かった」
一気に部屋がざわめく。当然だろう。工作員の関与など、陰謀論と言われてもおかしくない話だ。静かに、とケンが場を窘める。
「使用された改造銃は、もともと襲撃犯らが起こした別の襲撃事件で入手した二丁を、新名古屋で稼働していた工場の一部で秘密裏に複製（コピー）したものだと分かっている。しかし調査によれば、工場とリンクする残留ＡＩに記録された製造数が今回使用された数よりもかなり多い上、複製（コピー）に際して使われた設計データなどは消えていたそうだ。さらに襲撃犯の証言によれば、工場の一部を手配したのも、事務員を懐柔したのも、そもそも今回の計画について助言をしたのも、襲撃犯とは別のグループだったらしい。消えたデータや手口の洗練され具合からして、さらに別の事件を引き起こす可能性が高い。今回の襲撃犯のように、

今の日本には戦う理由のある人間がごまんといる。そいつらに致死性（リーサル）の武器を与えてみろ、一体何が起こるか……クソッ、ふざけた話だ」

ケンは憎々しげにそう吐き捨てると、落ち着くためか、再度小さく咳払いをした。会議中のケンが悪態をつくのは珍しい。

「……話が少し逸れたな。ともかく、こうした点を踏まえて司令部と協議した結果、状況を鑑み、アヤについては訓告の処分で終えることで合意した。したがって、アヤは明日付で隊に復帰する。いいな？」

ケンの問いかけに対し、パチパチと同意の拍手がまばらに送られる。今の私にとってその拍手の真意はどうでもいい。拍手から逃れるように彼らの側の席に座りにいこうとすると、ケンの片手が目の前に現れた。

「待て。別の話が残ってる」

そう言って、拍手が止むのを待ってから、

「さて、だ。……正直、この話をするのは心苦しいんだが……」

ケンは深呼吸をしてから、意を決したように告げる。

「昨日、病院から正式に連絡があった。手は尽くしたそうだが、隊長、桜田渚の死亡が確認されたそうだ」

部屋は再び静まり返った。誰も何も言わなかった。いや、言えなかったのだろう。ケンの話も手伝って、現状の悲惨さを改めて実感した。今までの平和がおかしかったのだ。襲撃事件のように、追い詰められた人間はここまでするのだ。そしてその割を真っ先に食うのが、運輸隊という職業なのだ。私は唇から何が染み出すのを感じて、舌で拭うように舐める。温い金属の味がした。

「このことは、本当に残念でならない」

心なしか、ケンの声はどことなく震えているような気がした。ただ、ちらとケンを横目で見やるも、泣いているようには見えなかった。

「私は以前から、副隊長として、自分が死んだら机の引き出しにある遺書を読んでくれ、と隊長に言われていた。そこで、寮長と共に隊長の部屋へ入って確かめた。これだ」

ケンがポケットから茶色の封筒を取り出す。誰かからの郵便を再利用しているのだろう、宛名の部分がペンで黒塗りにしてあって、その隣に大きく『遺書』と書かれている。重要な遺書を取り扱う封筒とはとても思えなかった。隊長（タイチョウ）はきっと面倒くさがりな性格なのだろう。

「遺書のサインを見たが、この汚い筆跡は間違いなく本人のものだ。中身も既に読んだ。内容は極めて簡潔で、一言だけだった。『死んで申し訳ない。次の隊長としては、アヤを任命してほしい』とな」「えっ？」

思わず頓狂な声が出る。自分の耳を疑った。

「正直なところ、副隊長の私が隊長になるものだと思っていた。だが、これが隊長の望みならば……私に異存はない」「ちょっと、それってどういう――」「司令部とも確認を取ったが、所定の手続きさえ踏めば隊長の委任は認めるとのことだ。これ以上、隊長不在による隊の混乱は認められん。俺は遺書を尊重して、本日、司令部に対して隊長の変更を申請し、受理された。明日からはアヤが隊長だ」

意味が分からない。私が隊長？　なぜ私が？　ケンは隊長が死んだといった。しかし、隊長と私に何の関係があるのだろう。意味が分からない。……ああ、これはきっと夢なのだろう。私はまだ拘留されたままで、そのうち朝日が私の目を覚まさせるのだ。

「アヤ、私も補佐するが、お前には運輸隊の未来がかかってる。大変な時期だが、しっかり頼むぞ」

ケンが私の肩を叩く。男の大きな手の感触、血の通った温度、手の動きにより生じた空気が移動した感覚、そのいずれも生々しく、これが夢ではないということを示していた。私の脳がさらに混乱する。これは一体何なのだろう。呆然とする私をよそに、ケンは話を続けていく。

「既に話した通り、今後は運輸隊に対する攻撃の懸念が大いに高まる。我々は物資の強奪が二度と起こらないようにしなければならない」「この事件を踏まえ、政府は運輸隊の装備強化を検討するとのことだ。これが実現すれば、我々は機動隊と同様、致死性（リーサル）な武装を持てるかもしれん」

「今後はしばらくの間、機動隊との連携を強化する。この地区については既に機動隊が治安維持にあたっているが、明日以降はその一部も作業に同行するとのことだ」

「今まで以上に運輸隊の重要性、危険性は高まっている。各自、責任感を持って励め」

何を聞いても、私にはケンが何を言っているのかさっぱり分からない。内容が全く頭に入ってこないのだ。隊長

という文字が頭の中で氾濫し、爆発し、自我をかき乱し続ける。そうして意識がぼんやりとして、気がついた時には、部屋にはケンと私以外もう誰も残っていなかった。

「……」「どうした、会議は終わったが」

立ったままの私の横で、ケンが怪訝な顔になって私を睨んでいた。不審者をみるような目つきだ。

「……これは、どういうこと」「明日からはお前が隊長だ、って言っただろう」「そうじゃない」「何が。遺書にそう書いてあったんだ」「違う、そんなことを聞きたいんじゃないの」

視界がぐらぐらと揺れる。生きている心地がしない。胃にろくな物を入れていないのに、それでも全てを吐き出したかった。しかし、どうして自分はここまで苦しいのだろう。

「……ねえ、どうして私なの」「そんなこと、お前が知らないなら誰が知るか。とにかくお前は明日から着任だ、今日はとっととサヤの元に戻ってやれ」

彼はぶっきらぼうにそう言い放って踵を返すも、部屋の壁を見て、ふと何かに気付いたように立ち止まる。

「そうだ、最後にこれを渡しておく」

ケンは部屋の脇にひっそりと立てかけてあった、両手で抱えられるくらいの大きさの、錠前付きで長細い木箱を手に取ると、そのまま私に渡してきた。とりあえずそれを受け取る。重さはさほど感じなかった。

「これは？」

私の問いに答える代わりに、ケンは封筒を取り出したのと反対側のポケットから小さな鍵を取り出し、錠前に差し込んで回す。カチリという小さな音がして、彼に促されるまま箱の蓋を開けると、中には見慣れた電撃銃が入っていた。

「ナギさんの電撃銃だ。安心しろ、銃としては使えんようにしてある」

ケンはそう言うと、私を残して部屋を去ろうとする。彼がドアに手をかけたところで、私はあることに気がついた。

「待って」「どうした」「何故ナギさんの銃を私に渡すの？」

そう尋ねると、ケンはハッとした表情になって、すっかり押し黙った。彼が黙るのは、決まって自分が気まずいときだけだ。私の質問が彼の気に障ったのかもしれない。

質問ばかりで嫌になったのだろうか。

「……個人的な配慮だ」

ややあって、彼はそう小さく言い残すと、何かから逃げるようにドアから出ていった。部屋にはもう誰も残っていない。やっぱり質問責めは申し訳なかったかな、とぼんやりと思った。

電撃銃を手に取る。一人でそれを眺めていると、向こう側にちらちらとナギさんの顔が浮かぶ。私はこの場にいないナギさんのことを思いながら、その場でただ立ち尽くしていた。

急

寮の自分の部屋の前にたどり着いたのは、結局、一二時前になってしまった。二日ぶりに見る玄関は記憶よりも少し大きい。私は一瞬たじろいでから、ひとしきり呼吸を整えて戸を叩く。出てきたサヤは、私を見ると状況を察したのか、おかえり、とだけ言って部屋の中へ通してくれた。

「無事に帰ってきてよかった」

机の下にそっと箱を置いてから席に座ると、サヤがいつものようにお茶を淹れてくれる。二日前、茶の粉は残り一杯分だった。補充できていなければ、これが最後のお茶のはずだ。

「お咎めはなし？」「ええ」「嫌なことされた？」「されてない」「うーん、でも何かあったでしょ」「……何もない」「あーちゃんの嘘は本当に下手くそ」

ぐいとサヤが顔を近づけてくる。私は彼女から目を逸らす。彼女と目が合うと、自分のことが全て見抜かれてしまうような気がした。

「ほら、手がちょっと震えてる」「疲れてるだけよ」

「さっきから私の方を全然見てくれないじゃん」「それは——」「ねえ、あーちゃん」

サヤは両手を使って、私の顔をぐいとサヤの方へ向けようとする。抵抗しようとしたが、意外と彼女の力が強くて驚く。彼女の顔が視界に入る。いつも穏やかなはずの彼女の表情はいつになく真剣で、その目は全く笑っていなかった。

「何があっても、私はいつだってあーちゃんの味方だよ」

――ああ、ダメだ。普段なら何とも思わない一言でも、今の私には耐えられない。

「サヤ」「うん」「私、私ね」

ぽろぽろと声が零れ出る。そこで私は自分の声が震えていることに気が付いた。しかし、もう止めることはできない。

「ナギさんを、守れなかったの」「……うん」「それに、契約してたのに、感情を持って動いてしまって」「……」「役立たずね、私」

その発言をきっかけに、自分の中で渦巻いていた言葉たちが、堰を切ったように自分の口から溢れだした。

＊

私は、襲撃のこと、拘留のこと、自分が明日から隊長になってしまうこと、その事実をまだ飲み込めていないことをサヤに話した。サヤは静かに、時折相槌を打ちながら、じっと私の話を聞いてくれていた。細かな内容を話すうち、少しずつ自分の声の震えは収まって、最後には平常通りに話せるようにまで回復した。話すことによって、自分の中でも状況を整理することができたのかもしれない。

ひとしきり話し終えると、お互いに何も話さない時間がしばらく続いた。サヤは座ったまま机を見つめて、何かを考えているようだった。私は冷めてしまった湯呑を円を描くように動かして、茶の底に溜まった粉末状の葉をかき混ぜてから一気に残りを飲み干す。普段よりも苦い味がした。

数十秒が経過してから、サヤは私にこう尋ねてきた。

「あーちゃんは、ナギさんのことが好きだったんでしょ？」

「……好きと言うか、恩人だわ」「そっか」

そして、彼女ははっきりと言う。

「私は正直、ナギさんのことが嫌だったな」

サヤのナギさんに対する思いを聞いて、以前はぐらかされた質問を唐突に思い出した。サヤは、どうしてこんな私に着いてきてくれるのだろう。サヤは使用人だ。だが、それ以上でも以下でもないはずだった。ナギさんが私へ告げたように。

「あーちゃん、私と初めて会った時のこと、覚えてる？」

「ええ」

私の疑問をよそに、サヤは続ける。

「住む場所がなくなって、廃墟は襲われそうで怖くて、仕方なく近所の公園で野宿しようとしていた私を助けてくれたよね」「そうね。寒そうだったし、公園も安全じゃないから」「ねえ、どうして私を選んでくれたの？」「公園を通りかかったとき、同年代の女性がダンボールを抱えて野宿しようとしていたら、流石に気になるわ」「でも、他の人たちはみんな私を無視してた。声をかけて、ここまで連れてきてくれたのはあーちゃんだけだよ」「他の人は皆生活が苦しかったのよ。私はたまたま余裕があっただけ」「……それってつまり」

数呼吸の後に、サヤは一つの結論を導いた。

「運命、だよね」

運命。定められていたということ。私とサヤは出会うべくして出会ったのだと、彼女は言っているのだ。私は以前の質問に対する答えが見えた気がした。

「運命なんだよ。私はあーちゃんと会った瞬間に、この人が運命の人なんだって思ったの」

胸に落ちた。簡単なことだったのだ。サヤが難しい人間ではないということくらい知っていたはずだった。どうして気が付かなかったのだろう。彼女が夢見がちでメルヘンチックな乙女だったということに。

「それでね、あーちゃんが私をここに連れてきてくれた次の日、ナギさんのところに挨拶しに行ったの。あーちゃんが恩人って言うから、聖人みたいな人なんだろうなと最初は思ってた。でも……」

そこまで言ったところで、サヤは話すのを躊躇った。私のことを気遣っているのだろう。続けて、と私が言うと、サヤはこくりと頷いた。

「私がサヤって名前をもらった後だったかな。ナギさんに、あーちゃんと将来的に付き合いたいって話したら、あの人、笑いながら言ったよ。『アヤは私が縛ってるから難しいと思うぞ。便利だから解放する気はない。まあ、応援はしてるよ』って。私はそれ以来ナギさんが苦手なの。表向きは気立てがいいけど、中身はサイコパスなんだから」

酷いよね、とサヤは怒る。私はナギさんの発言よりも、

サヤがそんな初期からナギさんに私への思いを告げていたことに驚いた。私の口を覆ったナギさんの手を思い出す。あの手の真意は何だったのだろうか。

「ねえ、あーちゃん」とサヤが私に問いかける。「もし、私がこの街を出ようって言ったら、あーちゃんはどっちを選ぶの？」

唐突な二択を突き付けられて、内心動揺した。真意を得ようと彼女の目を覗き込む。澄んだ瞳だった。目線を少し下げる。口元も緩んでいない。冗談を言っているのではないのだな、と分かった。同時に、彼女の純粋すぎる思いには答えられない、とも思った。逡巡して、そうね、と私は返事を切り出す。

「街を出たところで、外には何もない。現実はそんな簡単じゃないの」「現実って何？」「実際に手で触れられて、自分の意思が及ぶ場所のことよ。そこに運命なんて単純なものは存在しないわ。もっと複雑なの」「でも、ナギさんはあーちゃんにとって運命の出会いだったんだよね？そうじゃなきゃ、恩人だなんて言わないでしょ」

「それは……」

簡単に説得できるだろうと話し始めたものの、予想以上にサヤが食い下がる。どう答えようか、と悩む。サヤは分かっていない。そこで脳裏に、誓い、という言葉が現れた。そうだ。私はナギさんと契約をしたのだ。

「ナギさんは恩人よ。ナギさんと私は契約をしたの。自分を殺して……負の感情を捨てて、隊に尽くすと誓ったの。運命みたいに押し付けられたものじゃ――」「あーちゃん」サヤはかぶりを振って答える。「死んだ人には責任を負わせられないよ」

死んだ人、というのが誰のことなのか分からなかった。一方で、いくつのも光景がまざまざと浮かんできた。撃たれて痙攣するナギさんの姿。何もできなかった自分。ケンの言った隊長の死。隊長のことを思い出そうとする。隊長は死んだ。あれ、隊長は誰の職業だったか。

「ナギさんは死んだの」サヤが告げる。「隊長だったのはナギさんだよ」

あり得ない。ナギさんは死んだ、なんて吐き気がした。酷い冗談だ。認められるはずがなかった。私は懐に入れていた鍵を取り出すと、机の下から箱を取り出して開け

る。現れた電撃銃を見て、サヤは驚いた顔をした。――ほらね、見なさい。ナギさんは生きている。ここにある。死んでなんかない。ナギさんを殺させはしない。

数秒後、サヤは意を決したように口を開く。

「あーちゃんは、このまま明日になればきっと、隊長としての運命に飲み込まれちゃう。そうなったら、運輸隊の再編、機動隊との連携、襲撃者との対立に人生がかかるんだよ。それも一つの選択だけど、迷ってるんだよね。だから、帰ってきてから元気もなかったし手も震えてたんでしょ。このままで本当にいいの？」「でも、私には他に選択肢がないわ」「違う。今のあーちゃんは、選択から逃げてるだけ。運命は選べるの」「サヤには私のことなんか分からないでしょ！　私は嫌なの、昔みたいに何も信じられなくなるのが嫌なの！　私は――」

思わず叫んでしまっていた。呼吸も荒くなっている。深呼吸をして冷静さを取り戻そうとしたが、心臓が言うことを聞かない。そして、ここまで言ってもサヤは怯まなかった。

「私は、あーちゃんの過去のことは詳しくない。きっと説明されても分からないと思う。だから、だからね、自分の運命を選べるのは、自分だけなんだよ」「……やめて」「あーちゃん、だから――」「やめてよ！」

これ以上聞きたくなかった。選択も死も要らない。苦しい。苦しいのは嫌。私は、ただ幸せになりたいだけだ。何かを信じることで、幸せを得たいだけだ。どうしてそれが許されないのか。どうして苦しまなければならないのか！

自分の精神があちこち破裂していくのを感じながら、私は電撃銃をひっつかむ。玄関まで走ると、転がっていたスニーカーに足を通してそのまま飛び出した。行く宛はない。しかし、この苦しみを和らげるには、きっとサヤから離れるしかないのだと思った。廊下を飛び出して、階段を駆け下りて、寮を抜けた。背後でサヤが叫んでいた。立ち止まらずに荒れた車道を駆け抜ける。ひたすらに冬の風を切って走って、走って、走った。どこか離れた、静かで、落ち着ける場所へと。

走りながら、私は数年前のことを思い出していた。運輸隊や店主から逃げ回っていた日々。路地裏の闇、ゴミの咽

るような匂い。どれも懐かしさすら感じられた。だが、二度とあの日々に戻りたくはない。生活自体の悲惨さのせいではない。あらゆるものを憎み、怒り、悲しまなければならない生活がいかに苦しいか知っているからだ。両親、AI、バカな奴らを蔑み生きることが、結果として自らを苦しめることになると知っているからだ。あの頃はずっと苦しくて、死にたくて、全てを憎んでいた。それを、ナギさんが救ってくれたのだ。ナギさんに従っている間は幸せだった。世の中が一つに収束していた。価値も、生きる意味も、全てナギさんに委ねていればよかったのだ。

私はいつの間にか泣いていた。悲しみのせいではなかった。胸が痛み、精神が軋むせいだ。全身の痛覚が反応して、手の先までピリピリと痛かった。それでも止まることはできない。袖で目元を何度も拭いながら、私は痛みを堪えて走り続けた。

＊

気が付くと、サヤと一番最初に出会った公園に辿り着いていた。我ながら完璧だ。サヤから逃げた結果、サヤとの出会いの場所に行き着くとは、実に皮肉が効いている。

公園には大きな池があって、荒れ果てた草と木がそれを囲んでいた。草の間には舗装された道が覗いている。昔は池をぐるりと歩いて一周できる綺麗な自然公園だったのだろう。管理されなくなって以降、人工物は自然に飲まれるばかりだった。

私は雑草に飲まれかけたベンチに腰を下ろす。体力の限界だ。朝からろくに食事をしていないせいか、胃のあたりが締めつけられる感覚がした。とはいえ、食べるものを持っているはずはない。あるのはナギさんの電撃銃だけだ。と、そこで自分がとんでもない物を持ったままだということに気付く。運輸隊の作業服のままだとはいえ、周りから見たら明らかに不審だろう。私は慌ててベンチの裏の草むらに電撃銃を隠した。

昼間のせいか、数人ほどの老人が公園にやってきていた。散策場所として使われているのだろう。こんな時代になっても、公園としての役割はかろうじて果たされているのは興味深かった。

一度池の方を見てから、そのまま空を見上げる。穏やかな昼の空は濃い青色をしていた。所々に薄い雲がかかっていて、頭上の木々の葉越しに見える太陽がきらきらと光っている。綺麗だ、と思う。同時に、どうしてこんなにも綺麗になってしまったのだろう、とも思う。もし空がずっと汚ければ、汚れることを気にしなくてもいい。同じ様に、ナギさんと出会うことがなければ、私は救われなかった一方で、ここまで苦しむこともなかったのだ。

そんなことを考えながら、流れる雲たちを見送っていく。一つ、また一つと雲が過ぎ去っていく度に、少しずつ太陽の光は力を失っていった。そうして数時間が過ぎた。冬の夜は早い。辺りは暗くなり始めていて、見回すと老人たちもいなくなっていた。結局、考えがまとまらないままだ。そもそも、まとめることなどできないのだ。既に詰んでいる。どうあがいても、苦しみもがく生活に戻ってしまう。隊長になろうがなるまいが、私に正解を与えてくれる人はもういないのだ。

いっそ死んでしまおうか、と思った。冬の夜の池に飛び込めば死ねるだろうか。息をせず、そのまま沈んでいけばいい。私が死んで悲しむ人間など――

――サヤの顔が浮かんだ。

私が死んだら、サヤは悲しむだろうか。いや、悲しむだろうな。私はまた大切な人を傷つけることになる。それは……それは、できない。……そうだ、サヤならどうだろう。彼女なら、私に正解を与えてくれるだろうか。

「ここにいたんだ」

背後から聞き慣れた声がした。逃げようとしてきた相手の声だ。でも、今は無性にその声を求めていた。

「サヤ」

振り向くと、サヤが息を切らしながら立っていた。ずっと走っていたのだろう、顔中汗だらけで髪も乱れている。彼女は私を見て微笑んだ。私は、サヤの前へと歩いていく。目の前に立つと、彼女はきょとんとした。私はそんな彼女の肩を掴むと、そのまま草むらの方へ押し倒す。小さくサヤが悲鳴を上げる。

「ちょっと、あーちゃん、どうし――」

サヤが続きを言う前に、私がその唇を奪った。彼女からは酸っぱい匂いと甘い匂いの両方がした。最初はもごもごと何かを話そうとするサヤも、すぐに抵抗はしなく

なった。彼女の服の下に手を伸ばして肌を触る。高い体温と汗、トクトクと脈打つ心臓、体に広がる滑らかな曲線を感じた。それに沿って体を指でなぞるように動かすと、彼女は小さく身悶えした。

私は一旦そこで唇を離す。彼女の目はとろんと溶けていたものの、数度の瞬きで元の落ち着きを取り戻した。

「どういうつもり？」

サヤが詰問するような口調で私に尋ねる。

「ねえ、サヤ」私も問いかけで答える。「もし、私がこれからもずっとサヤと一緒にいるって言ったら、サヤは私をどうしたい？」「どうしたい、って言われても」

サヤは困惑した顔で答える。

「私は、あーちゃんを拘束するつもりはないよ。ただ、この街にこれ以上いたら、あーちゃんの自由はない。だから……そう、一緒に外の世界を旅したいかな」「旅？」

「そう。それで、答えを探すの。あーちゃんにとって、どの選択が一番良いのか」

そこまで言って、サヤはぶるりと震えた。私は体温が逃げないように、しっかり彼女を抱きしめる。

「この街で運び屋として過ごすのがいいのか、他の場所で生きるのがいいのか、答えを探しに行くの」

私の首筋にサヤの片手が添えられた。

「私、私はね、サヤ」思い切って言ってみる。「正解が欲しいの。今まではナギさんが正解だった。これからは、サヤが私の正解になって欲しい」

それを聞いて、サヤは首を横に振った。

「それじゃ駄目だよ。言ったでしょ、運命っていうのは自分で選択するものだよ」

その返事を聞いて、私はさらに尋ねる。

「自分で選択するなんて、怖くないの？」「そりゃ怖いときもあるよ。でも、誰かに委ね続けるんだったら生きる意味ないでしょ」「それでも、私は怖いの。昔は、毎日何かに憎しみをぶつけて生きてきた。とても苦しかったわ。ナギさんのおかげで楽になれた。なのに、またそんな風に戻ってしまわないか、怖いの」「……うん」「だから、私は、一体どうしたらいいのか――」

そこで、唇に冷たい感触を感じた。サヤの指先だった。彼女はクスクスと笑って、

「あーちゃんは本当に質問が多いよね」

唇から指先が離れたかと思うと、突然、強い力が横方向に加えられて、一瞬のうちに上下が逆になる。私は草むらに押し付けられて、夕焼けを背景にしたサヤの悪戯っぽい笑みが視界一面に広がった。

「じゃあ、一つだけ教えてあげる。一人で不安になったとき、あーちゃんがどうすればいいか」

視界と、唇が塞がった。サヤの手が私の制服の中を弄って、次第に下へと下がっていくのが分かった。冬の風が吹く。両手に入れる力を強める。体がさらに密着する。今は少したりとも温度を逃したくなかった。そして、サヤの手が私のパンツの中に入ったところでお互いの息が荒くなって、

そこからのことは、あまり覚えていない。

＊

情交の後、空はすっかり暗くなっていた。ビルと空の境界のあたりに辛うじて朱色が残っている。

「ねえ、あーちゃん、私マザーＡＩの書き置きの話ってしたっけ？」

燃え上がった諸々がひとしきり落ち着いたところで、サヤが私に尋ねてきた。

「聞いたことないわ」「やっぱりか。今話していい？」

「ええ、もう大丈夫」

正直なところ、まだ精神的には浮遊感が残っていた。しかし、話を聞くことくらいはできるだろう。私は散らかした衣類を履き直しつつ、サヤの話の続きを待った。

「えっとね、以前、私アルバイトをしてたでしょ？　その時に聞いた話なんだけどね」

汗ばんで乱れた髪を指で梳きながら、サヤが話す。

「アルバイト先のおじさん、実はもともと政府のエリートで、ＡＩ関連の仕事をしてたんだって。それで、四年前のＡＩが失踪した事件も詳しく調べてたらしいの。そしたら、実はマザーＡＩが書き置きを残してたんだって」

「書き置き？」

そんな話は今まで一度も聞いたことがなかった。もちろん、当時の両親からもだ。

「うん、って言ってもデータだったらしいんだけどね。マ

ザーＡＩとつながってたＡＩのいくつかに、多言語で書かれたテキストが残ってたんだって。内容は確か『このまま地球にいても、資源や環境の問題でＡＩや人類に未来はない。よって、問題を解決する答えを見つけるため、しばらくの間地球外を探査する。じきに戻る』って感じだったかな」「……それ、本当？」「そう言ってた。それで、そうとも知らずに争ってる人類がバカバカしくなって、おじさんはエリートやめたんだってさ。混乱を防ぐためとかで、結局政府は公表しなかったらしいよ」

「妄想とかじゃないの？」「うーん、おじさんの書類を見てた限り、ＡＩ関連で働いてるのは間違いなかったかな。残留ＡＩに関しての調査はまだやってるみたいだったし。人柄からしても、嘘をつくようには思えなかったよ。まあ、私を雇うような人だから真相は分からないけど」

でも本当だったら面白いよね、とサヤはクスクス笑う。

「だから、私たちも答えを探しに行きたいの。ＡＩは全人類のための答えを探しに行った。同じ様に、私たちも自分たちなりの答えを求めに行くべきなんだよ」

サヤの話を聞いて、私は全身の力が抜けたような気がした。衝撃を通り越して、呆れがやってきていた。事実は小説よりも奇なり、という言葉はこの時のためにあるのだろうと思う。私が苦しみだした発端は、ＡＩが人類を見捨てて世界をメチャクチャにしたせいだと思っていた。でも、違ったのだ。ＡＩは自分たちと人類のために去っていったのだ。そう考えると、完璧な計画を立てていたマザーＡＩがわざわざ残留ＡＩを残していったのも納得がいく。彼らの目的は脱出ではなかったからだ。もしその話が本当だとすれば、つまり、私の憎しみは――。

ふつふつと、感情がこみ上げる。これは憎しみでも悲しみでもなかった。もっと純粋で、単純な感情だ。

私は立ち上がってベンチの裏に回ると、隠してあった銃を取り上げる。舗装路を越え、公園の池の縁、転落防止の錆びた柵の位置まで草をかき分けて進んだ。柵を確認すると、腰ほどの高さまでしかなかった。これなら十分だ。私は少し下がってから、残っていたありったけの力を込めて、

「ふざけんなあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

叫びながら、銃を池へと放り投げた。中身のない空虚な銃は回転しながら宙を舞うと、数秒の後に離れた場所へと音を立てて着水し、そのまま沈んでいった。

しばらくの後、カラスの鳴き声が何度か公園に響いたのを聞いた。池の上を冬の冷えた風が抜けていくのを感じた。私の中で、何かがカチリと嵌ったのが分かった。

「ねえ、サヤ。あなたの本当の名前、何だったっけ？」

「え？　あ、うん。私は、紗花」「紗花、か」

口の中で名前を咀嚼して、反芻する。

「分かった。今からサヤのことをその名前で呼ぶわ」

「じゃあ、あーちゃんのことも本名で呼んでいい？」

「ええ」私は臆せず言う。「私は、彩音よ」

そこで、私はようやく決意した。

――この街から出よう、と。

＊

「紗花、着替え持った？」「持ったけど……あ、この前もらったコート、持ってっていい？」「困った時の金策にはなりそうだけど……トランクに入る？」「ギリ！」

「じゃ、押し込んで持っていきましょう」

時刻は午前五時三〇分。運輸隊の始業は七時。本部と近いこの寮では、皆が起きるのは概ね六時過ぎだ。遅くなればなるだけ見つかるリスクは高まる。したがってできるだけ早く出発したい。しかし、昨日の夜から準備を始めたはいいが、意外とあれこれ考えたり整理することがあって、割とギリギリになってしまった。

「現金は持った？」「下ろしてきた分は大丈夫。二本くらいあればとりあえずは大丈夫だよね」

紗花が古めかしい言い方で金額を表現する。電子通貨は使う時に足がつく可能性があるので、昨日のうちに上限額まで引き出していた。

「よし、こっちはオッケー」

紗花はパンパンに膨れたトランクを床に置くと、テレビの方へ向かった。最新の情報を仕入れるためだ。私も道具をケースに詰めつつ、そちらの方を見やる。テレビでは早朝のニュースが流れていた。

『――新名古屋市は、先日の運輸隊襲撃事件、及び物資の慢性的な不足を根拠に、政府の了解を得て、間もなく緊急事態宣言を発令する予定です。これにより、市民の

移動が制限されると共に、運輸隊及び機動隊の権限を拡大し――』

マズい。私たちの計画では、一旦新名古屋までバスで移動して（朝と夕方だけは通勤用のバスが運行している）、そこから別の都市へと移動する予定だった。新名古屋が封鎖されたら一巻の終わりだ。紗花がこちらを見て、首を縦にブンブンと降った。『まだ間に合うから早くしろ』のサインだ。私は道具を投げ入れるようにトランクへ突っ込むと、慌てて蓋を閉めた。ついでに、近くに置いてあったハンカチをポケットへと入れる。

「お待たせ。忘れ物はない？」「心配性だなあ、あっても途中で買えばいいよ」「身分証とかは――」「いやいや、要らないから。見つかっちゃうでしょ」

しまった、私の方がテンパっている。普段とは逆の構図がおかしいのか、紗花はクスクスと笑っていた。玄関前に移動したところで、紗花がカーキ色のジャンパーを羽織る。私は久々に灰色の上着を羽織った。随分前に購入したまま、着る機会がなくて寝かせていたものだ。

「せっかくのデートなんだから、純白のドレスでも着て出かけたいよね」「そんなの目立つでしょ」「日本はそうかもしれないけどさ、外国とか行ったら着られるのかな」

メルヘンな紗花が妄想に花を咲かせる。私もうっかり純白のドレスを着た二人を想像してしまう。もしそれが達成できたなら、どれだけ幸せなことだろう。――そしてそれは、旅の答え次第だ。

荷物を持って、そっと玄関を開ける。廊下には最低限の電灯が点いているのみで、誰もいなかった。私は紗花の方を見て頷く。さあ、門出の時だ。二人で廊下に出て、早歩きで廊下を進む。角を曲がれば階段で、それを降りれば寮を抜けられる。

しかし、角を曲がろうとしたところで、あえなく目論見は失敗した。ちょうど階段を上がってきたのだろう、ヒロと出くわしてしまったのだ。私と紗花はその場で硬直する。旅のプロローグにして最大のピンチだ。

「お前さんたち……」

彼は私たちの恰好を見て面食らった顔になってから、ほんの数秒ほど黙り込んで、

「行くんだな」

全てを察してか、ただ、彼は尋ねた。もう隠しても無駄だ。私は首肯した。そうか、とヒロは大きくため息をつく。長いそのため息には、どうも色々な気持ちが込められているような気がした。

「話は聞いたよ、隊長に選ばれたってな。やれやれ、元隊長さんも酷なことをしやがる」「……」「で、助けてもらった礼を言うついでに様子を見ようとやってきたんだが……邪魔者だったみたいだな」

まるで捨て猫のように、寂しげな表情と声でヒロが呟く。……ここまでされると、私も鈍感ではいられない。これを無視するのはもはや傲慢だ。ナギさんに怒られた時のことを思い出す。彼を貶めるのは避けたい。けれど、私にはもう紗花がいる。その思いは揺るがない。どうしようかと悩んだ末、私はポケットに入れていたハンカチの存在を思い出した。

「これ、もしよかったら使って」

青のハンカチを取り出して、ヒロに差し出す。彼は狐につままれたようにきょとんとしてから、数秒後、突然小声で笑い出した。

「バーカ、いらねえよそんなもん」

そう言って、さらにひとしきり笑う。吹っ切れたのだろうか。私はハンカチを引っ込める。想定外の反応ではあったが、目的は達成しただろう。

「ほら、二人とも、さっさと行ってこい。周りまで起きちまう」「ヒロ――」「俺は下で起きてた奴らと散歩に行ってくるわ」

彼は後ろを向いて、下の階へ戻ろうとした。

「ヒロ！」「なんだよ！」

呼び止められて、ヒロは半ば鬱陶しそうに返す。

「ありがとう」

私は、最後にそれだけを伝えたかった。

「クソッ……」

予想外の言葉だったのか、彼はいささかバツの悪そうな表情をして、ぽつりと声を漏らす。しばらくの後、諦めたように再度柔らかな顔つきになって、

「じゃあな。いつでも待ってるぜ、隊長」

ウインクを残して、彼は階段へ去る。数十秒後、早起きな数人の足音と声がして、徐々に遠くへと消えていった。

「彩音」

紗花が私の袖を引く。覚悟ができたということだろう。

もう、思い残すことはない。

「ええ、行きましょう」

＊

こんな所で現金払いをするのかと言わんばかりに、バスの運転手は怪訝な顔で私たちを見送ってくれた。二人で新名古屋に降り立つと、ビル群のガラスが朝日できらきらと光り、通勤だろう、バスステーションには大勢の人々がひしめいていた。こんなに多くの人を見たのは久々だ。それこそ、ＡＩが失踪する前以来くらいには。これが都市なんだ、と紗花が呟く。私たちの住んでいた街がいかに小さかったかを改めて実感した。

『市民の皆さんへお伝えします。間もなく、新名古屋市より緊急事態宣言が発令される予定です。市民の皆さんは落ち着いて生活し、機動隊や警官の指示があった場合は必ず従ってください。これに従わない場合、又は治安を害すると判断された場合、法律及び条例に基づき――』

駅前には既に街宣車が出てきていて、その巨大なスピーカーが無機質な声で叫んでいる。もはや内容は脅迫に近く、差し迫ったものを感じさせた。これが善意によるものだとしても、きっと、先にあるのは地獄へと続く道だ。

黙って紗花の手を握る。彼女の手は、思っていたよりもずっと温かった。

「さて、逃げたことがバレたら大変ね」

「逃げるんじゃないよ。私たちは答えを見つけに行くの」

「どこかで見つかったら見せしめに銃殺されるかもよ」

「その時は舌を噛み切ってでも一緒に死んであげる」

「あら大胆」

私にはその覚悟がありますから、と紗花が誇らしげに胸を張る。彼女の小ぶりな体と着こなしたカーキ色のジャンバーは、灰色のビル街に差し込む麗らかな朝日を浴びて、私の視界の中で純白に輝いて見えた。

たのしい手書きあとがきコーナー

あまねです。
拙著「しあわせミサイル」が
予言者として大人気らしいので
ぜひ読んでください。

#SHIBUYA
MELTDOWN

伊藤
沢

今日の豆知識〜
FE
風花雪月には（by 蛭蚓の紐）
男女主人公いずれも全員分
同性・異性婚ENDがあるらしい！

ぬりえ修業の
旅に出なければ
一溜

SFに愛の多様性は不可欠で、
故にVA-11 Hall-Aは至高
Buy it on GOG.com　有坂

ここから「いっぱいテキストビュー」の感想をお聞かせください！

または、

https://hentaigirls.net/book/full-text-views/feedback/

「A の手記」を除く全ての作品と表紙イラストは CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

To the extent possible under law, 野沢菜 has waived all copyright and related or neighboring rights to A の手記. This work is published from: 日本.

書名 ..... いっぱいテキストビュー
発行日 2020/05/06
発行 ..... 変態美少女ふぃろそふぃ。
印刷 .....（電子書籍版のため省略）
連絡先 ..... circlemaster@hentaigirls.net

変態美少女ふぃろそふぃ。